

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第97集

# 長平衛平遺跡

平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

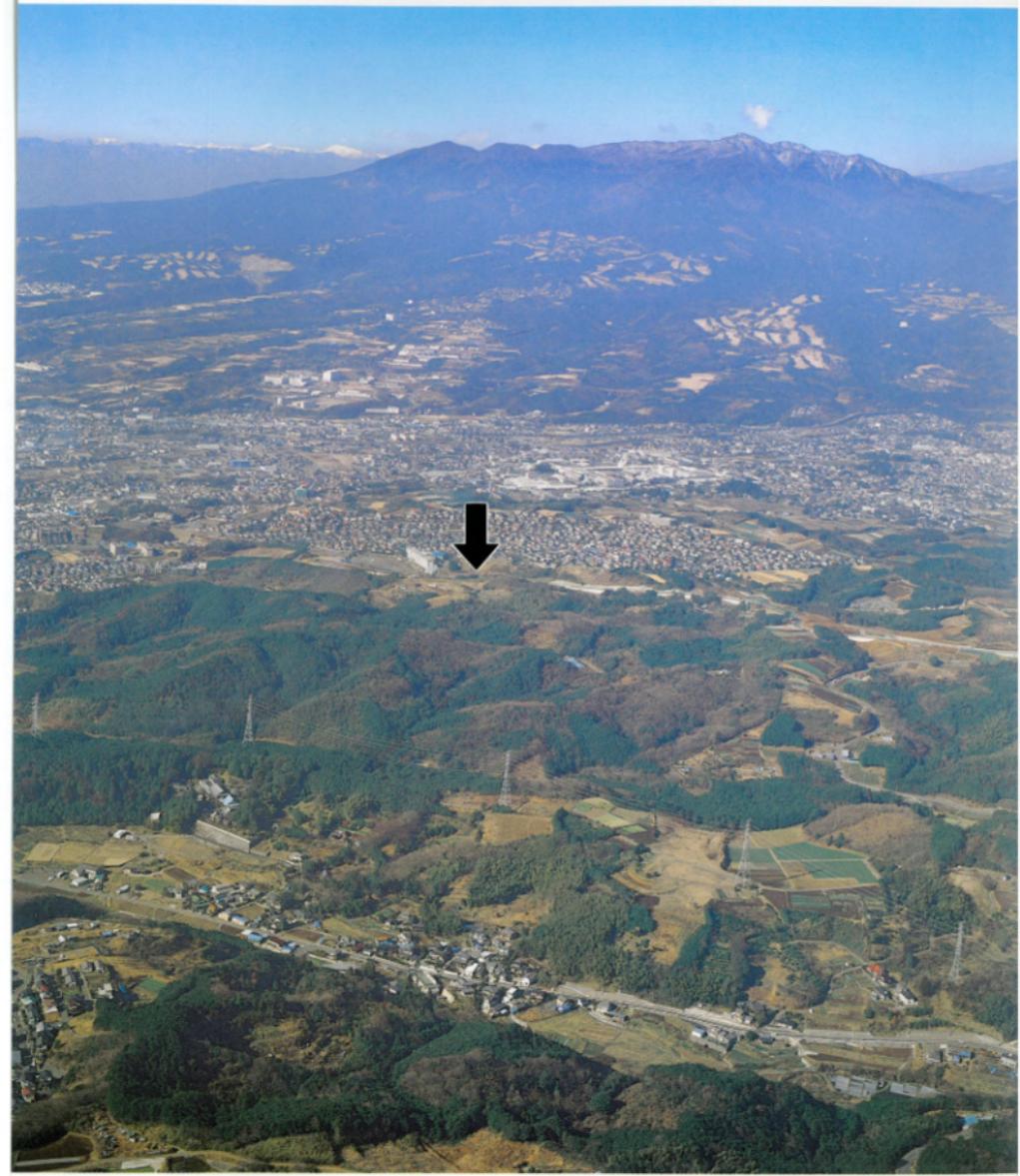
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第97集

# 長 平 衛 平 遺 跡

平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



遺跡の周辺  
(▲地点が長平衝平遺跡、後方は愛鷹山)

## 序

三島市は、東西に細長い静岡県東部にあり、伊豆の玄関口に位置する。古くは伊豆国分寺が置かれ、伊豆国の一宮である三嶋大社が鎮座するなど歴史的文化遺産を残す場所として、位置付けることもできる。埋蔵文化財の包蔵地も多く、現代に至るまで文化が連續と発展し続いている地であり、近年の調査研究によって様々な好資料が得られている。平成2年度から実施してきた箱根山西麓を通過する東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査では、今回の調査に至るまで9ヶ所の遺跡が調査された。この中で、加茂ノ洞B遺跡では約27,000年前の土坑が17基も検出するなど、大きな成果が得られている。これらの発見は、旧石器時代から縄文時代における箱根西麓地方の歴史を認識する上で、これまで三島市教育委員会が実施した調査結果とあわせて、さらに詳細な考古的資料を数多く提供することになった。

今回報告する長平衡平遺跡は、東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財調査として実施されたものである。遺跡が尾根筋の斜面上に位置している点から、旧石器時代の文化層は確認することができなかったが、縄文時代の遺物を含む層は良好に残されており、土器や石器の出土をみた。遺構として、集石土坑の検出はあったが、その他顯著な遺構はとらえられなかった点、今回調査した箇所は遺跡の外縁部と考えられる。当遺跡周辺には小池遺跡や徳倉B遺跡など縄文時代の住居跡や遺物を多く包蔵する遺跡も同時に調査されている。それらの遺跡の成果とあわせて、長平衡平遺跡の報告は、縄文時代の箱根西麓の文化を知る手がかりの一つとなるものと思われる。

最後になったが、調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省中部地方建設局沼津工事事務所・静岡県教育委員会・三島市教育委員会をはじめとする関係各位に多人なる援助・協力をいただいた。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げる。また、厳しい状況の中で現地調査・資料整理に参加した調査員作業員の労をねぎらいたい。

平成10年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　　言

- 1 本書は三島市徳倉1158番地他に所在する長平衛平遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は、平成7年度に実施した第1次調査（確認調査）の結果に基づき、平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部建設局沿岸工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成9年4月から7月まで現地調査を実施し、8月から平成10年3月まで資料整理を行った。
- 3 調査の体制は次のとおりである。

平成7年度（確認調査）  
所長 斎藤忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 小崎章男  
調査研究四課長 橋本敬之、調査研究員 濑戸俊昭・小川正大

平成9年度（本調査）  
所長 斎藤忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 石垣英夫  
調査研究四課長 橋本敬之、調査研究員 後藤正人・高野穂多果
- 4 本書の執筆は後藤が行った。
- 5 発掘調査資料はすべて（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 6 本書の編集は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

## 凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 調査方眼設定は、国家座標（平面直角座標標柵系）の軸線を基準に設定した。
- 2 方位は上記のX軸に従った。
- 3 出土遺物は、各層ごとに通し番号を付して取り上げ、土器P、石器S、礫Rの略号を付した。
- 4 遺物の出土位置については、座標で明記した。座標はA 0 グリッドを(X, Y)=(0, 0)とした。
- 5 遺構実測図の基本は、1/20とし、状況によって縮尺を変えた。
- 6 出土遺物実測図の縮尺は、石器1/1、上器1/2を基本としたが、状況によって縮尺率を変えている。
- 7 石器実測図において、を示してある部分は磨痕である。
- 8 土層の色調は、新版『標準土色帖』1997年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 9 本文中・挿図、挿表中の表記は次のとおりである。

層　　名	
K u	栗色土層
F B a	富士黒土層 a
F B b	富士黒土層 b
Y L U	休場層上層
Y L L	休場層下層
M P	三島バミス

# 目 次

巻頭写真

序

例 言

凡 例

## 第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	
1 現地調査の方法	3
2 資料整理の方法	3
3 現地調査の経過	4

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と歴史的環境	7
第2節 基本土層	10
第3節 遺跡の土層堆積状況	12

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺跡の地形と造構の概要	15
第2節 遺構	16
第3節 遺物の概要	23
第4節 土器	23
第5節 石器	29

## 第Ⅳ章 まとめ

34
----

## 挿図目次

第1図 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財 包蔵地位置と路線図	1	第9図 十坑実測図 2	20
第2図 調査区におけるグリッド配置および トレチ・テストピット設定図	6	第10図 十坑実測図 3	21
第3図 長平塙平遺跡位置図および 周辺遺跡分布図	8	第11図 磨石分布図（平面・垂直分布図）	22
第4図 基本上層柱状図	11	第12図 遺物出土分布図	25
第5図 土層堆積図	13	第13図 縄文土器拓影図 1・縄文上器実測図	26
第6図 長平塙平遺跡と周辺地形	15	第14図 縄文土器拓影図 2	27
第7図 上坑分布図	18	第15図 石鐵・楔形石器実測図	30
第8図 集石土坑・土坑実測図 1	19	第16図 打製石斧実測図、 磨石・敲石・台石実測図 1	31
		第17図 磨石・敲石・台石実測図 2	32
		第18図 磨石・敲石・台石実測図 3	33

## 挿表目次

表1 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財 包蔵地一覧	2	表4 集石上坑・土坑計測表	21
表2 作業工程表	5	表5 上器觀察表	28
表3 長平塙平遺跡および周辺遺跡地点表	9	表6 石器觀察表	29

## 写真図版目次

図版1 1号集石土坑検出状況（俯瞰）	図版4 縄文土器（1-21）
1号集石土坑完掘状況（俯瞰）	図版5 縄文土器（22-45）
図版2 1号上坑完掘状況（北東より）	図版6 石鐵・楔形石器
2号上坑完掘状況（南より）	打製石斧
5号土坑完掘状況（北西より）	図版7 磨石・敲石・台石
図版3 6号土坑完掘状況（南東より）	
7号土坑完掘状況（南西より）	
礫の集中地点（2区・南より）	

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

静岡県三島市は、東海道新幹線を利用するなら、首都圏より1時間以内の距離にある。近年、首都圏からのベッドタウン化が著しく進み、人口も増加の一途をたどっている。そのような状況に伴う国道1号線などの幹線道路の慢性的渋滞は、伊豆への観光、東海道における流通経済をはじめ、地域住民の生活にも深刻な影響を与えることになった。そのような問題解消の一環として計画されたのが、東駿河湾環状道路建設である。この道路の計画路線は、沼津市岡宮から愛鷹山南東麓、黄瀬川を通過し、箱根山西麓を迂回し、函南町平井の熱海道路に至り、さらに国道136号線の伊豆中央道に合流する総延長15.0kmの片側2車線の広規格道路である。

上記の路線は、旧石器・縄文時代を中心とする多くの遺跡が存在する地域を通過することになっている。三島市を通過する路線箇所に関しては、平成2年9月に三島市教育委員会によって遺跡確認踏査が行われ、その結果31箇所の遺跡確認がなされた。さらにその結果を受け、調査委託者となる建設省中部建設局沼津工事事務所と静岡県教育委員会文化課による協議を経て、静岡県教育委員会の指導のもとに当研究所が調査を実施する運びとなった。平成4年度に本調査が行われた焼場遺跡A地点より始まり下原遺跡、加茂ノ洞B遺跡、八田原遺跡などにおいてはすでに調査結果が報告されている。

長平衡平遺跡は、縄文土器の散布地として周知の遺跡であり、上記の三島市分路線内遺跡31箇所のうち第4地点にあたる。（下記の第1図においては16地点）平成8年3月に確認調査が行われ、その結果、休場層中より礫群が検出されたという報告を受け、平成9年度事業の一環の中で本格的調査が行われることになった。

なお、東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地については、第1図および表1に記した。



第1図 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地位置と路線図

表1 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地一覧

第1回上位 番号	所在地	遺跡名	面積 (ha)	内 容	調査状況
1	沼津市	上松沢平	16.440		調査予定
2	沼津市	虎杖原1号墳	4.150		調査予定
3	沼津市		2.650		調査予定
4	沼津市	丸尾北	6.160		調査予定
5	長泉町	柏窪B	800		調査予定
6	長泉町	桜畠上	6.200		調査予定
7	長泉町	山岸A	4.400		H9確認調査
8	長泉町	木戸	4.800		H9確認調査
9	長泉町	池田B	5.812		調査予定
10	長泉町	鉢平	14.400		調査予定
11	長泉町	大平	12.000	中・近世	H8調査
12	三島市		12.000		調査予定
13	三島市	萩B	2.000		調査予定
14	三島市	北ノ入A	1.440		H7確認調査、H9本調査予定
16	三島市	長平衡平	1.040	縄文	H9本調査「法門寺平遺跡」1998
17	三島市	小池	5.310	旧石器～縄文	H9本調査
18	三島市				
19	三島市	徳倉B	2.370	縄文	H8本調査
20	三島市	上ノ池	1.320	旧石器～縄文	H7・8本調査
21	三島市	遺跡なし			H5確認調査
22	三島市	八田原	14.000	旧石器～縄文、中・近世	H7本調査「八田原遺跡」1997
23	三島市	加茂ノ瀬B	1.300	旧石器～縄文	H6本調査「加茂ノ瀬B遺跡」1996
24	三島市	遺跡なし			H5確認調査
25	三島市				市道につき調査対象外
26	三島市	五百司	1.140	集石	H5確認調査「徳倉徳倉B地点、五百司遺跡」1996
27	三島市	焼場	5.500	旧石器～縄文、中・近世	H4・7本調査「徳倉徳倉A焼場」1994 「徳倉徳倉B焼場、五百司遺跡」1996
28	三島市	下原	14.375	旧石器～縄文	H5本調査「下原遺跡」1995、 「下原遺跡」1996
29	三島市	押出シ	2.810	縄文中期集落	H8・9本調査
30	三島市	生茨沢	6.750	旧石器～縄文	H8確認調査
31	三島市	中峯	2.750	旧石器～縄文	H9本調査「中峯遺跡」1998
33	三島市	桧林A	7.440	旧石器～縄文、中・近世	H8・9本調査
34	三島市		1.870		調査予定
35	三島市		1.190		H9確認調査
36	三島市	ヌタウチバ山	4.310		H9確認調査
37	三島市		1.940		H9確認調査
38	三島市	田頭山	5.750		調査予定
39	三島市	大明神洞	5.000		調査予定
40	三島市	長命洞B	2.120		調査予定
41	三島市	大場向山B	1.060		調査予定
42	三島市		19.845		調査予定

## 第2節 調査の経過

### 1 現地調査の方法

長平衛平遺跡では、東駿河湾環状道路建設に伴い調査された周辺遺跡（上ノ池遺跡、徳倉B遺跡、小池遺跡）の調査におけるグリット設定と同様に国土座標に基づき、10m四方の方眼を組む方法を採用した。グリットの呼称は、東西方向をアルファベットで表し、西からA、B、C・・・とし、南北方向は算用数字で示し、南から1、2、3・・・とした。なお、グリット名は南西優位で示し、方位に関しては国土方眼に基づいた。A 0 [ 国土座標では ( X・Y ) = ( -94410.00・38600.00 ) ] の座標を、仮に ( X・Y ) = ( 0・0 ) とし、遺構・遺物などの位置や標高 ( H ) を記録した。

確認調査により、休場層中に縄群が調査予定区全面に広がる可能性があるという見解を受けていたことより、本調査に先立ち再び、遺跡の範囲確認のため、等高線にはば垂直方向にトレントを設定した。調査予定区の南東側谷筋の尾根上にトレント1を設定し、トレント1にはば平行する方向で、かつ調査予定区中央部にトレント2を定める。トレント幅は2mとし、長さに関しては、トレント1は28m、トレント2は25mとなった。なお、トレントのそれぞれ端の部分には2×2mのテストピットを設定し、基本層序を確認するために深掘りを試みた。

トレント2の上層堆積状況に基づいて、トレント2より約15m北西方にトレント3を設定し、さらに等高線に平行する形でトレント1～3に至る間にトレント4を掘削し、上層堆積の厚さを確認する。トレント2より南東側には遺跡が広がらないことを確認した後、各トレントの境界を区切りとしてトレント2～3間の南西側を1区、北東側を2区、トレント3より北西側を3区とする。そして、1区より表土除去を開始し、平面精査を行う。1区の調査を終了後、2、3区をほぼ同時並行して調査に入る。なお、作業の能率化をはかるために、2、3区の耕土は1区に集積する。掘削方法に関してはすべて人力による手掘りで行う。

実測に関しては、機材はトータルステーション ( TOPCON GUPPY GTS-510F ) を主に使用した。図面に関しては、1/20の縮尺率を基本としたが、必要に応じ、1/10などの縮尺率も採用した。

写真撮影に関しては、中型カメラ（白黒）、小型カメラ（白黒、カラーネガ、カラースライド）を使用した。

### 2 資料整理の方法

平成9年7月より本書作成のための整理作業に入った。遺構に関しては、まず現地で作成された実測図の整理、検討を行い、風倒木痕など自然遺構は本書掲載を省略した。出土遺物は、表面採集のものを含めて合計283点である（但し、礫は除く）。本来なら、すべての出土遺物を図化し、掲載することが理想と思われるが、遺物の状態や整理作業における時間的制約等を加味し、担当調査員により掲載遺物を選択した。遺物は土器、石器が主であるが、瓦片等も出土した。遺物の石材鑑定は双眼実体顕微鏡（ニコンファーブル）を使用した。なお、実測・計測を終了した遺構、遺物はカードを作成し、出土位置や図面番号等を明記して、本研究所にて収納保管する。

### 3 現地調査の経過

#### (1) 確認調査（平成8年3月6日～18日）

工事予定地内に路線中央ラインを基準に任意にグリッド杭を設定した後、4ヵ所に $2 \times 2$ mのテストピットを設定、掘削した。この結果、後に調査予定区域になる箇所（緩斜面部分）より北東に位置する地域はすでに上部ロームは確認されずに本調査の対象外という判断を下した。予定地内の緩斜面部分の休場層より頁岩の石器を中心とする石器ブロックと礫群が検出され、その遺構が緩斜面のほぼ全域に分布していることを確認し、その旨を静岡県教育委員会に報告した。

#### (2) 本調査（平成9年4月9日～7月31日）

4月9日より遺跡および周辺の草刈りを開始する。現場は、耕作地の跡であり、雑草が覆い茂っている状況であった。さらに遺跡への進入路の整備、駐車場の完備、プレハブ棟設置など順次行う。また、調査区域は斜面にあたるため、しがら材と丸太杭による土止め柵の設置など安全養生対策を念入りに行う。

4月15日に、トレント1および2を設定し、本格的に掘削作業に入る。トレント1は、南東側谷筋の尾根上に設定したが、表上の直下はすでに二島バミス(MP)を含む黄褐色ローム層が広がっており、すでに上部ロームは崩落したという認識にたった。トレント2に関しては、富士黒色上層(FB層)が、平均15～20cmほど堆積しており、縄文土器片や焼礫の検出もあった。トレント2の土層堆積状況の結果を受け、トレント2に平行する形で、約15m北西方向にトレント3を設定し、遺物を含むFB層の堆積分布の確認をはかった。トレント3に関しても、FB層の堆積が比較的良好であり、焼礫も検出された。トレント3の斜面下側の端部にテストピットを設定掘削した。休場相当層の最下層部分より、その多くが酸化したこぶし大の安山岩が検出された。当初、旧石器時代の礫群と思われたが、休場相当層に、MPが散在するなど純粹な休場層とは異なり、二次堆積上であり、さらにその層の直下には上部ロームが確認されなかった点などより、安山岩の集中地点に関しては下部ロームの箱根新期軽石流による自然礫と判断し、調査の対象から除外した。なお、確認調査で検出された礫群もこれと同種の自然物であったことが確認された。また、トレント2、3で確認された休場相当層よりは遺物の出土がなかったことを受け、当遺跡における調査対象はFB層および休場相当層直上までと判断した。さらに、FB層の分布、堆積厚を確認するため、トレント1～3に直交する形でトレント4を設定する。トレント4の結果を受け、トレント2より南東側には遺跡が広がらないという結論を下し、5月6日より、1区表土除去に入る。

5月12日に、FB層中より黒耀石製の石器の出土をみた。5月27日より2区、29日より3区とほぼ同時に並行して表土除去、平面精査に入る。1区の調査は6月13日に完了する。6月中は雨天も多く、作業中止を余儀なくされる日が多く、工程に遅れが見えてきたことは否めなかった。2、3区は7月も継続して調査が行われ、集石土坑の検出などがあったが、7月16日をもって現地調査を完了した。なお、撤収作業に関しては、7月中旬より漸次行っていた。重機による埋め戻し作業は、7月30日より2日間で終え、8月5日に委託者の建設省中部建設局沼津工事事務所の立会いのもとに現地引き渡しを行った。なお、室内作業は、当研究所三島整理事務所にて、7月17日より遺物注記等の残務などを中心に開始した。

表2 作業工程表

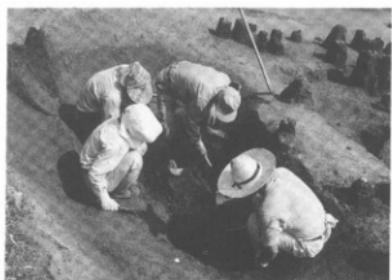
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成7年度												確認調査
平成9年度	●	---	現地調査	-----●●	-----資料整理	-----	-----●	-----長延・発掘	-----●	所		



確認調査風景



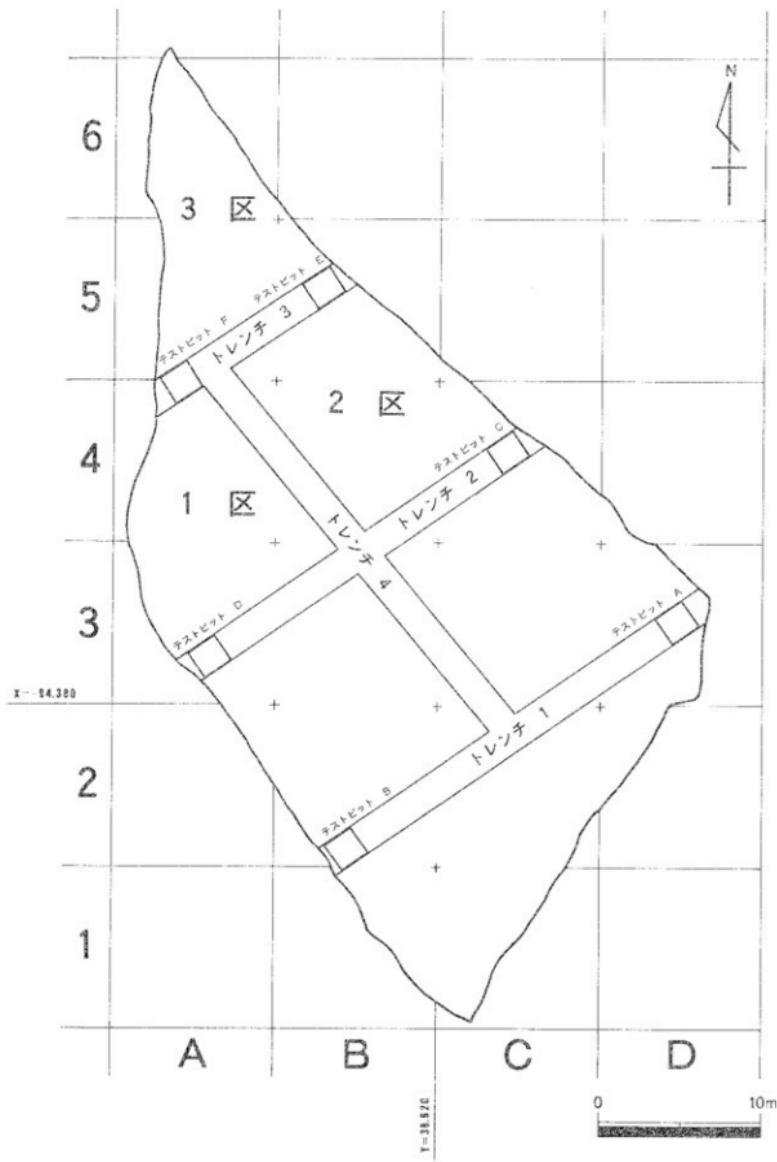
本調査・平面精査風景



本調査・土坑(7号)調査風景



資料整理・土器拓本取り風景



第2図 調査区におけるグリッド配度およびトレーンチ・テストピット設定図 (1/300)

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と歴史的環境

三島市は静岡県東部の伊豆半島北部中央で、半島の付け根部分に位置する。三島市の地形は、大半すると3つに区分することができる。市内東側に広がり、緩傾斜地を形成している箱根山古期外輪山西麓地域、現在の二島市街地が立地する富士火山がもたらした溶岩流の末端部にあたる扇状地地域、そして市街地の南部に広がる狩野川下流域を構成する沖積平野地域である。三島市の遺跡分布をみると、箱根山西麓地域には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中する。扇状地部分から沖積平野地域にかけては、弥生時代から近代に至るまでの遺跡が連続と続く。特にこの地域は古代より伊豆国を中心であり、国分寺、国分尼寺、さらに江戸時代には徳川家光による三島御殿や近世東海道の三嶋宿、さらには伊豆国一宮であり現在まで引き続いている三嶋大社なども立地している。

長平衡平遺跡は、上記の区分では箱根山西麓地域の北西部に位置する。箱根山西麓地域は、丘陵、小河川、浸食谷によって3区分が可能である。北から大場川と沢地川に区分された佐野、徳倉、沢地地区、沢地川と山田川に区切られた川原ヶ谷、加茂地区、そして山田川と来光川によって区切られた谷田、玉沢地区である。長平衡平遺跡は、大場川と沢地川に区分された徳倉地区に含まれ、通称末広山の南西側に展開する尾根筋の端部からの傾斜地に立地する。

箱根山西麓地区は、昭和時代の後半より宅地造成やゴルフ場建設など大規模な開発がなされ、発掘調査も精力的に実施され、様々な成果がもたらされた。また、さらに今後の研究成果も期待される地域である。縄文時代関係だけでも、例えば、敷石住居など多数の住居跡を検出し明治時代より周知の遺跡である千枚原A遺跡（第3図【以下省略】18）をはじめ枚挙にいとまがない。そのようななかで、長平衡平遺跡と同じ東駿河湾環状道路予定路線内に立地する下原遺跡（8）では、東日本において最古例となる逆茂木施設を配する土坑の検出があり、草創期にはすでに早期以降東日本で広く活用されていた落し穴による狩猟方法が行われたことを裏付けるような発見があった。同じく東駿河湾環状道路予定路線内にある押出シ遺跡（9）では中期の住居跡が30軒以上は存在していたと考えられ、夥しい数の土器、石製品などが出土しており、資料整理によって今後の縄文時代研究に良好な資料を提供することになるであろう。その南東に位置する同じく東駿河湾環状道路建設関係で調査が進んでいる松林A遺跡（10）では、草創期の有舌尖頭器が狭範囲で高密度に出土した。現在の三島市立山田中学校内に位置する十石洞遺跡（16）では集落ではない場所に、敷石住居跡が1軒のみ検出されたのは珍しい事例である。

長平衡平遺跡は『三島市誌』（1958年発行）には、市の沢遺跡と表記されている周知の遺跡と思われる。同書によれば「北の入遺跡の丘陵の上方で、標高130メートル。楕円押型土器と繊維土器が出土しているが、微量で詳細はよく分からない。須恵器を作出する。」とあり、同書に掲載されている地図上の位置と静岡県文化財地図I（1988年発行）上における位置とほぼ一致する。なお、静岡県文化財地図Iでは長平衡平遺跡として掲載されており、縄文土器の散布地と記されている。付近には小池遺跡（2）、徳倉B遺跡（3）、上ノ池遺跡（4）など、旧石器～縄文時代に至るまでの複合遺跡が点在している。



第3図 長平衛平遺跡位置図および周辺遺跡分布図

表3 長平衛平遺跡および周辺遺跡地点表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	長平衛平	14	初音ヶ原B	27	片平山A
2	小池	15	塚原南原	28	徳倉片平山I
3	徳倉B	16	十石洞	29	徳倉片平山H
4	上ノ池	17	加茂・向山	30	徳倉片平山B
5	八田原	18	千枚原A	31	佐野片平山F
6	加茂ノ洞B	19	乾草峠	32	佐野片平山S
7	焼場A・B、五百司	20	赤松	33	佐野片平山T
8	下原	21	徳倉片平山E	34	佐野片平山H
9	押出シ	22	徳倉片平山D	35	佐野片平山G
10	桧林A	23	徳倉片平山L	36	陣笠山A
11	小平B	24	徳倉片平山K	37	陣笠山II
12	小平C	25	片平山	38	ソノエンサレB
13	初音ヶ原A	26	徳倉片平山J	39	中村C

## 第2節 基本土層

箱根西麓に堆積しているローム層は、『箱根西麓ローム』と呼称される。ローム層は、上から上部ローム、中部ローム、下部ロームの3層に大別できる。現在までの調査では旧石器時代の遺構や遺物が確認されているのは、上部ロームのみである。長平衡平遺跡における上部ローム相当の堆積状況は箱根山西麓や愛鷹山南麓の多くの遺跡にみられるような、整然と水平堆積する基本的層序とは異なり休場層と他の層が混じりあった二次堆積土である。この節においてこの二次堆積土を休場相当層と呼ぶことにする。長平衡平遺跡では、休場相当層以下において黒色帯やスコリア帯の堆積は認められず、休場相当層の直下は中部ロームや下部ロームが広がっている。このような堆積状況に関して、遺跡に立地するのは尾根筋の斜面のため、黒色帯やスコリア帯がすでに崩落したものと思われる。また、休場相当層は、斜面の上方から流入してきたものであろう。

表土の下は、暗黄褐色を呈し、カワゴ平バミスを含む富士黒色土aと思われる層であるが、調査区全体に広がりが認められず、部分的に散在しているのみである。おそらく、近年の植林や耕作によって攢押された結果ではなかろうか。その下位に、暗褐色を呈する富士黒色土bの堆積が認められる。縄文時代の遺物を多く含む層で、当遺跡の山土物の大半を占め、長平衡平遺跡においては調査の中心となった層である。なお、富士黒色土bの直下に堆積する休場相当層は無遺物包含層で調査の対象外とした。

- 第1層 表土 赤褐色を呈し、縞まりがなくパサパサしている。植物の根茎を多く含む。耕作や植林によって天地返しを受けており、縄文土器片などが探出される。
- 第2層 富士黒色土層a (F B a) 暗黄褐色を呈す。 $\phi 0.1 \sim 0.2$  cmほどのカワゴ平バミスを含む橙色スコリアを極少量含む。
- 第3層 富士黒色土層b (F B b) 暗褐色を呈す。休場相当層に漸移的に推移しないので明確に区分できるのが特徴である。F B aに比して、スコリアの包含量が少ない。また、カワゴ平バミスはほとんど含まない。固くしまっているが、乾燥しやすく、水はけがよい。
- 第4層 休場相当層上層 (Y L U相当) 黄暗褐色を呈し、純粹に堆積している休場層（一般に明黄褐色を呈している）に比して色彩がくすんでいる。 $\phi 0.1 \sim 0.2$  cmほどの橙色スコリアを少量含む。斜面上に堆積している点などを推測すると、上部ロームと混土をなして斜面上方から流出してきたものと考えられる。
- 第5層 休場相当層下層 (Y L L相当) 黄暗褐色を呈する。Y L U相当層に比して、やわらかく、乾燥しやすいのが特徴。下層部においては、こぶし大の自然隕の堆積が認められる。 $\phi 0.5 \sim 1.0$  cmほどの三島バミス(MP)のブロックが検出された地点もあった。Y L U相当層と同様に上部ロームや中部ロームとの混土で斜面上方から流出してきた二次堆積土と考えられる。
- 第6層 黄褐色ローム層 6、7層は中部ロームである。 $\phi 0.5 \sim 1.0$  cmのMPを含む。固くしまっており、乾燥しやすい。
- 第7層 暗褐色ローム層 MPや黄色の $\phi 0.2$  cmほどの礫、青灰色を呈し、 $\phi 1.0$  cmほどの軽石を含む。固くしまっている。
- 第8層 暗褐色粘質土 8層より下層は下部ロームである。 $\phi 0.1 \sim 0.5$  cmほどの黄色スコリア、橙色スコリア、 $\phi 1.0$  cmほどの青灰色ラビリを極少量含む以外、ほとんど鉱物含有物を含まない。
- 第9層 褐色ローム層  $\phi 0.1 \sim 0.5$  cmほどの橙色スコリアを極少量含み、固くひきしまっている。

第10層 褐色ローム層 第9層に比べても、スコリア粒子が少なく、固くしまっており、ほとんどの鉱物含有物を含まない。

0 (m)		層名	色調
1	1	△ 表土	(5YR4/3)
2	2	△ 富士黑色土層a (FBa)	(10YR4/3)
2	3	△ 富士黑色土層b (FBb)	(10YR3/3)
3 (上部ローム・中部ローム混土層)	4	△ 休場相当層上層 (YLU相当)	(10YR5/4)
4 (中部ローム混土層)	5	△ 休場相当層下層 (YLL相当)	(10YR5/4)
5 (中部ローム層)	6	△ 黄褐色ローム層	(10YR5/6)
6 (下部ローム)	7	△ 暗褐色ローム層	(10YR3/4)
7 (ローム)	8	△ 暗褐色粘質土	(10YR3/4)
8 (ローム)	9	△ 褐色ローム層	(7.5YR4/4)
9 (ローム)	10	△ 褐色ローム層	(7.5YR4/4)

第4図 基本土層柱状図

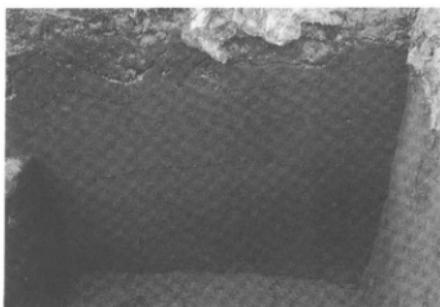
### 第3節 遺跡の土層堆積状況

長平衛平遺跡は、箱根山西麓地域の北西部に位置し、通称末広山の南西側に形成された斜面上に立地する。調査対象区においては平坦地がない。調査予定区の南東部半分は、表の下はすでに上部ロームの堆積が認められず、調査の対象外とした。北西部に関しては、標高125～132mほどで平均傾度15°の傾斜地である。1～2区に比べ3区の方が比較的緩傾斜をなしている。

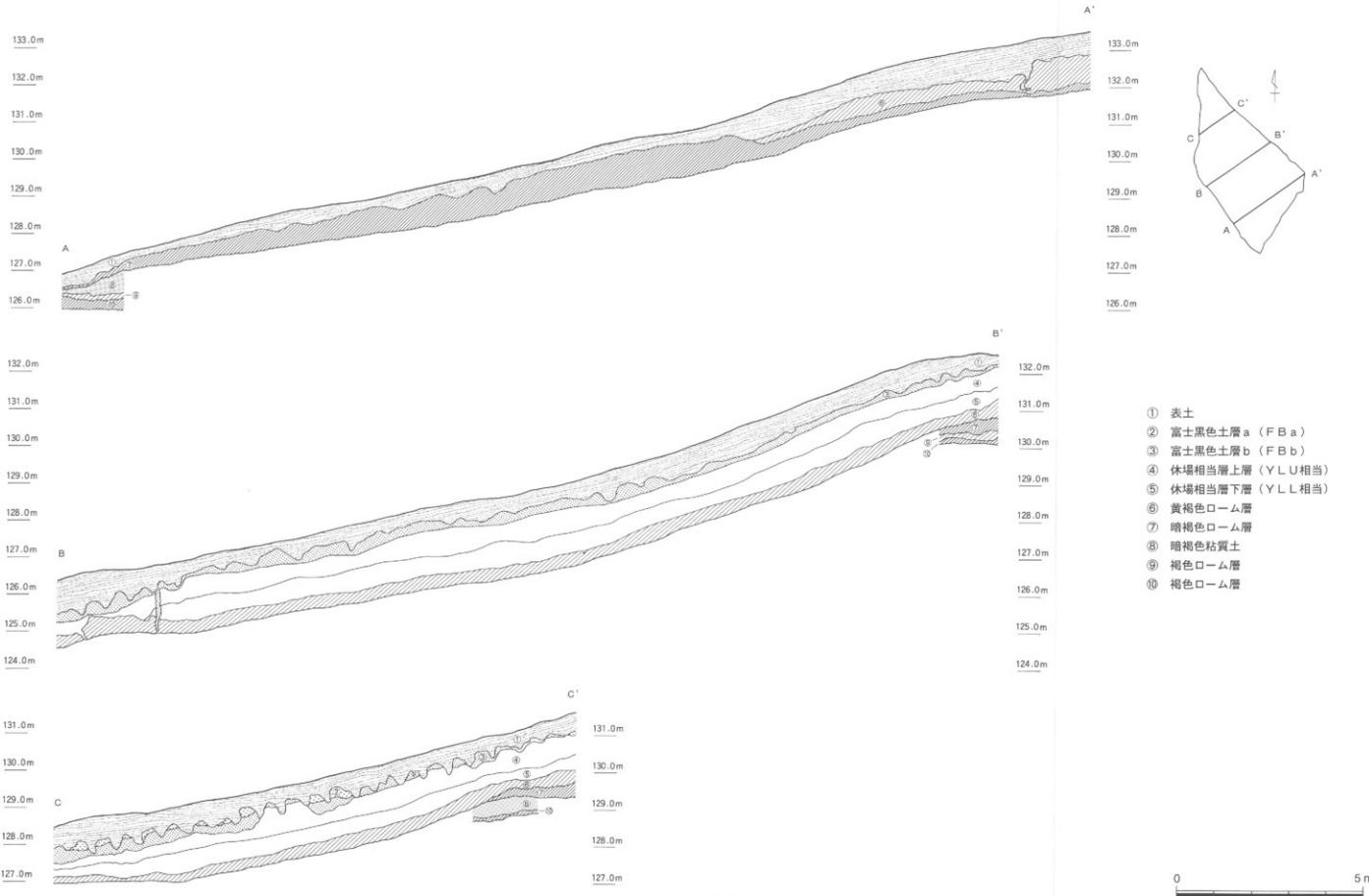
調査対象区では、FBa層に関しては耕作や植林などによって削平され、部分的に残存しているのみである。なお、栗色土(Ku)も、カワゴ平バミスの広がりが確認できる点から、本来はFBa層の上部に堆積していたが、すでに消失したことは容易に想像できる。FBb層は、1～2区において良好で、安定した堆積状態を示している。また、休場相当層に関しては、本来は存在していたであろうと思われる上部ロームの黒色土層やスコリア層が斜面上から崩落した後、調査区上方斜面から流入してきた二次堆積土と考えられる。



調査区北西から南東方向をのぞむ(傾斜の様子がわかる)



テストピットC土層断面  
(写真上方木の根の直下に堆積する層がFBb層である)



第5図 土層堆積図 (1/100)

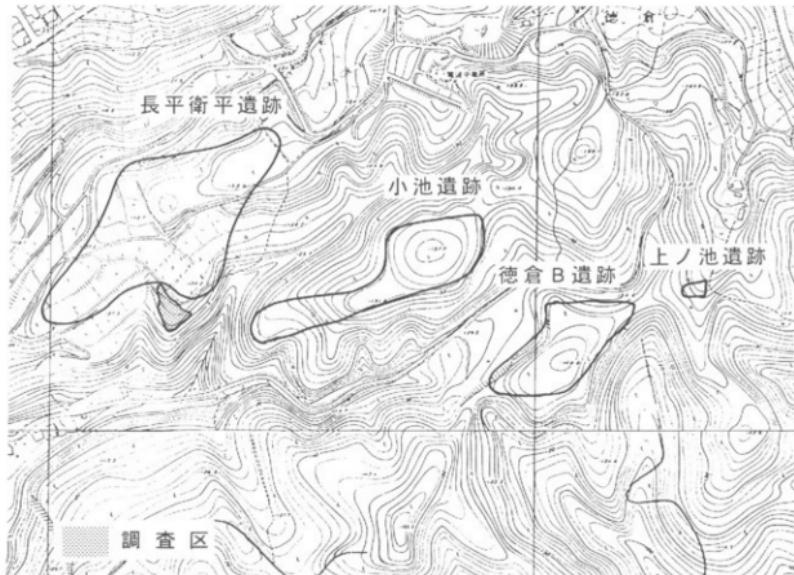
## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 遺跡の地形と遺構の概要

遺跡調査の対象地区における地形は、最高地点で131.5mを測り、最低地点ではおよそ125.5mほどである。南西方向から北東方向に進むにしたがって傾斜は急峻となる。標高128mの等高線に沿う付近に、なだらかな緩傾斜地が存在する。調査区全体では平均傾斜15°ほどである。

調査区は、調査以前は荒地であったが、植林地や耕作地として利用された時期もあった。そのため、周囲は西側には竹林や人工林が広がり、北西から東方向にかけて畠地となっている。なお、南東部は谷地形を形成しており、急峻である。

長平衡平遺跡では、1～2区においては比較的F B b層の堆積状態が良く、遺構も良好な状態で残存していたといえる。しかし、地形的に傾斜が強く、検出された遺構も性格不明の土坑と傾斜方向にはほぼ水平分布している礫群のみであった。土坑は等高線に直行する形で南西方向から北東方向に分布しているが、その相関関係は特ないと思われる。3区においては、耕作や植林などによる搅乱が多く、F B層の堆積状態が悪く、遺構も消失したことが考えられる。集石土坑も、集石の上部は表土直下にあり、検出面より上方はすでに消失した可能性が高い。なお、検出された遺構はすべて縄文時代のものと考えられる。



第6図 長平衡平遺跡と周辺地形 (1/5000)

## 第2節 遺構

### (1) 1号集石土坑（第8図）

本遺跡では、集石下に掘り込みを有する集石土坑が1基検出された。A 5グリット北側に位置し、表土直下のF B a層上層部より集石の上部が検出された。表土は、耕作や植林によって擾乱されていることを考えれば、集石は検出時よりさらに高く積まれていた可能性がある。65点の礫が、東西22cm、南北31cmの範囲の中で集積されている。集石を構成する礫の石材はすべて安山岩であった。受熱による赤化は19個の礫に確認された。しかし、そのほとんどが明赤褐色のもので、燃焼度は極めて弱い。礫の中でも最大のものは径14cm、幅8cm、重量82gを有す。最小のものは径2.5cm、幅1.8cm、重量2gを測る。なお、集石の間よりφ3mmほどの黒耀石チップが1片出土した。集石下の掘り込みは径31cm、深さ25cmを有す。土坑の覆土はF B a相当層の暗褐色土で、しまりは極めて弱い。また、φ1～2mmの橙色スコリア及びφ2～4mmの小石を極少量含むが、その他の含有物は認められなかった。

### (2) 1号土坑（第8図）

A-3グリットの北東に位置する。最大径114cm、最大深40cmを計る。東西方向を長軸とした楕円形を呈する。検出面はF B b最下層である。南西部分の約1/4ほどが箇所に炭化物を多く含む掘り込みを有する。遺構に伴う遺物は特に検出されなかった。性格は不明である。

### (3) 2号土坑（第8図）

B-4グリットの北西に位置する。最大径48cm、最小径41cm、最大深16cmを計り、極めて円形に近い形状を呈している。検出面はF B b最下層であり、検出面上部に多量の赤褐色の焼土が広がっている。木が倒壊しないまま燃焼し、焼土だけが残存したとも考えられるが、明確な判断は難しい。なお、遺構に伴う遺物は有しない。

### (4) 3号土坑（第9図）

A-3グリット北側に位置する。最大径81cm、最大深13cmを計る。東側の1/3ほどは擾乱を受けている。北西から南東方向へ向け、楕円形を呈すると考えられる。検出面は、F B b層上位で、検出上面の覆土は、カワゴ平バミスを含むK uとF B aとの混土と考えられ、黒褐色を呈している。遺構に伴う遺物は有しない。なお、東側側面部分は、擾乱によりすでに消滅している。

### (5) 4号土坑（第9図）

A-3グリット中央部に位置する。最小径は73cmで、最大深18cmを計る。検出面はF B b層上位である。南北に細長い形状を有していたものと思われるが、周囲の擾乱によって、すでに北端および南端部は消失している。中央部分にカワゴ平バミスを含むK u相当の堆積土の流入が見られる。底部はY L U相当層まで掘り込まれている。遺構に伴う遺物の出土はなかった。

### (6) 5号土坑（第9図）

B-4グリット北東に位置する。最大径117cm、最小径93cmを計り、北東から南西方向にかけての軸を長軸とする楕円形を呈する。検出面はF B b層上位である。焼土と炭化物を多量に含む。堆積層位を

観察すると、極短期間に埋没したものと思われる。2号土坑と同様に木が倒壊しないまま燃焼した痕跡とも考えられる。底部はMPを含む中部ロームに至っている。遺構に伴う遺物は出土していない。

#### (7) 6号土坑（第10図）

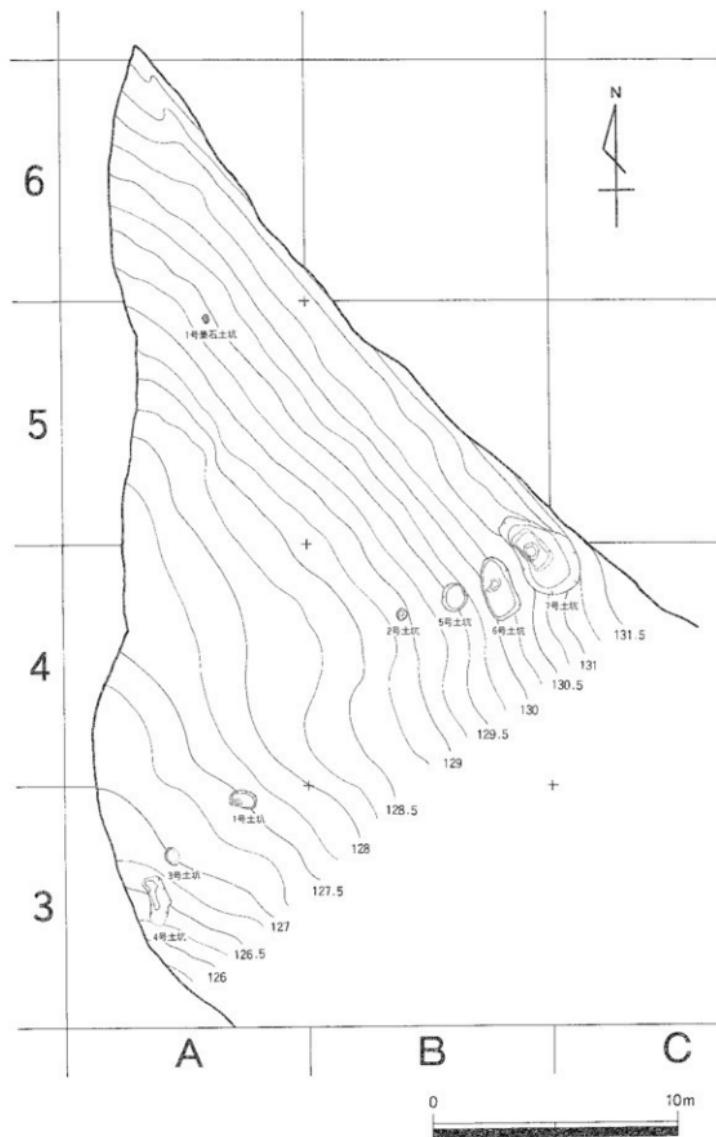
B-4グリット北東に位置する。最大径162cm、最大深52cmを計る。北西から南東方向にかけての軸を長軸とする。検出面はF'B'b層上位である。中央よりやや北西側に掘り込みを有し、底部はMPを含む中部ロームまで達している。覆土中より黒曜石の剝片が1片出土している。また、勝坂式縦位区画パネル文様を有する上器片（第14図-27）が出土している。

#### (8) 7号土坑（第10図）

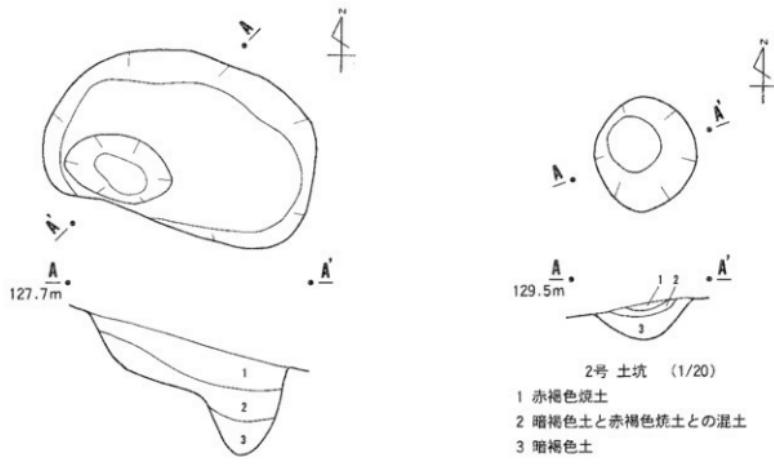
B-4グリット北東に位置する。最大径396cm、最大深58cmを呈し、長平衡平遺跡では、最大かつ最深の遺構である。検出面はF'B'b層上位である。長軸は北西から南東方向にかけて延びている。6号土坑とは約30cmほど離れて隣接しており、ほぼ同じ方向に基軸が向いている。底部は、二段構造をなしており、中央部よりやや北西側に掘り込みを有し、MPが散在する中部ロームまで達している。遺構に伴う遺物の出土はなかった。凹面部に人為的な打痕が認められる台石の一部（第15図-3）と勝坂式縦位区画パネル文様を有する上器片（第14図-34）が覆土中より出土している。

#### (9) 磨の集中地点（第11図）

磨は1、2区を中心に824個検出された。そのうち、受熱などにより赤化している磨は263個体を数える。最大重量の磨は3936gを計測し、平均すると178gほどでコブシ大のものが多い。石材はすべて安山岩であった。磨は標高126～131mほどの箇所に斜面とほぼ水平方向に分布している。磨は1～2区に集中しており、B-4グリット内が最も高密度である。3区では表土中に赤化している磨が検出されたが、これは攪乱により散在してしまった結果と思われる。本來は、等高線に沿って北西方向に延びていたとも考えられる。赤化した磨と、そうではない磨との分布に関しては特に関連性はない。赤化している磨は調査区全体に拡散しているのに対し、赤化していない磨はB-4グリット北東側に特に集中している。土坑との関連としては、6号、7号土坑に関してはその覆土上にも磨の検出があった。1号、3号、4号土坑と磨の集中地点は、その重複する位置がずれている。石器や土器の出土地点と磨の集中地点との相関関係は特につかめない。



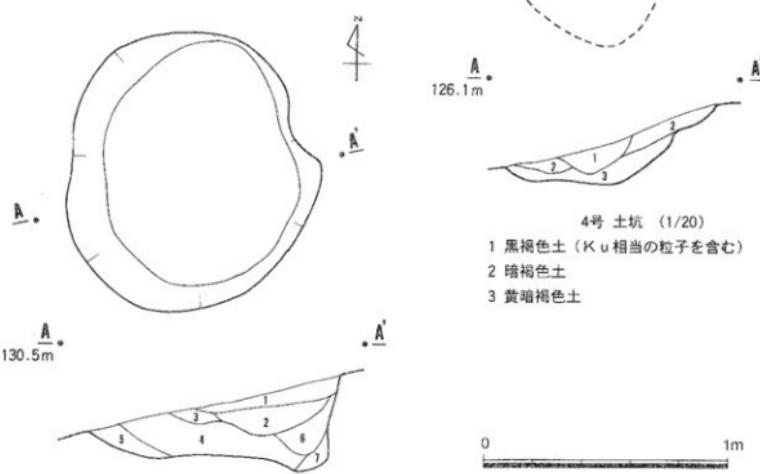
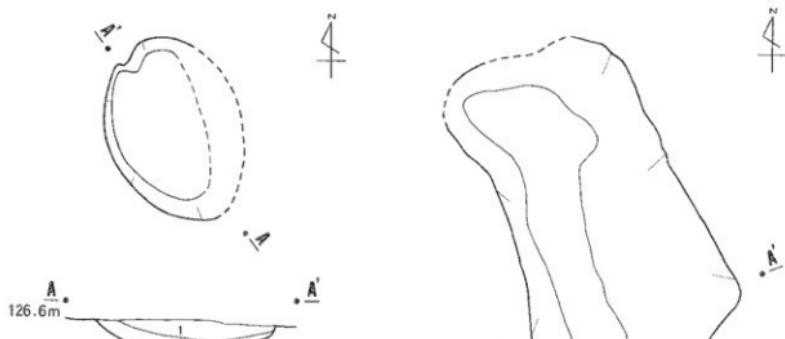
第7図 土坑分布図 (1/200)



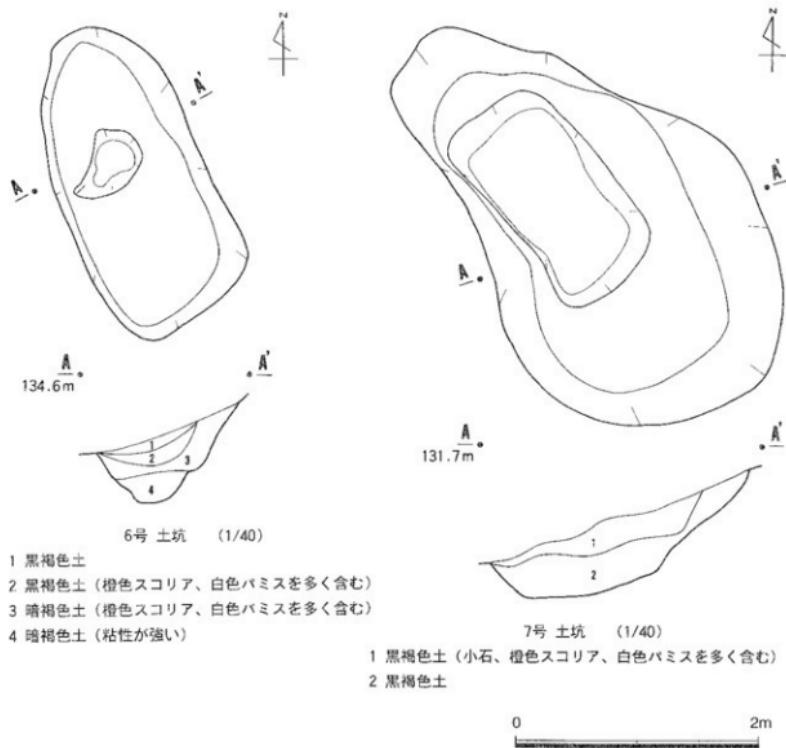
1号 土坑 (1/20)  
 1 暗褐色土 (F B b相当)  
 2 暗黄褐色土 (炭化物を多く含む)  
 3 黄褐色土 (炭化物を多く含む)

0 1m

第8図 集石土坑・土坑実測図1



第9図 土坑実測図2

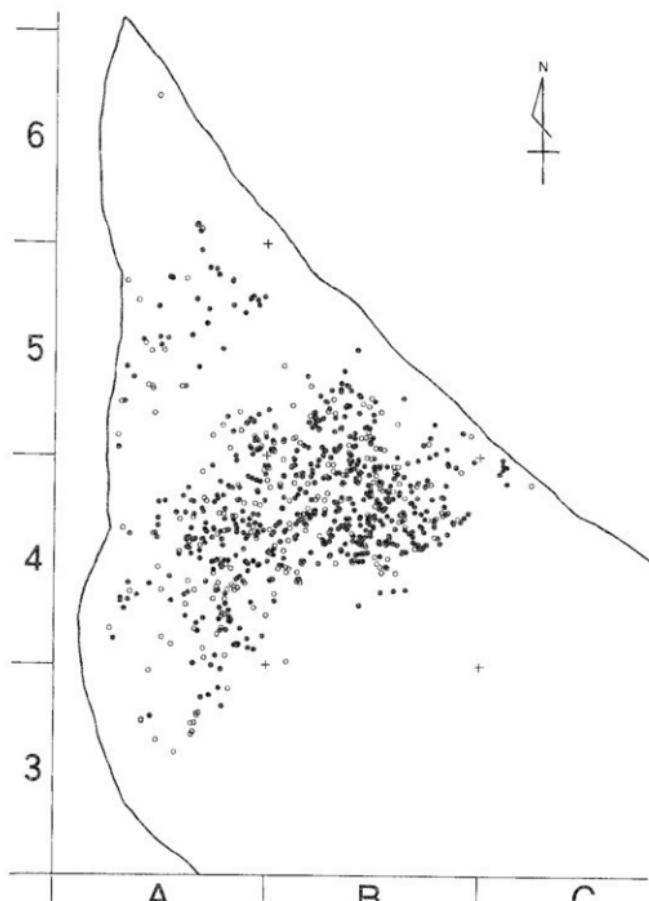


第10図 土坑実測図 3

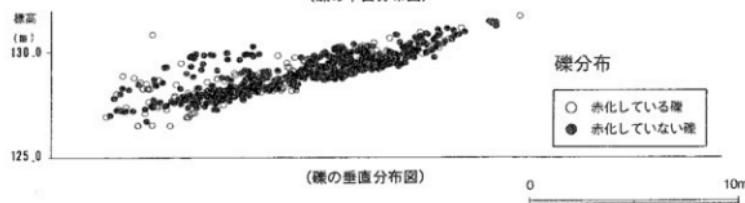
表4 集石土坑・土坑計測表

	最大径 (cm)	最小径 (cm)	最大深 (cm)
1号集石土坑	31	21	25
1号土坑	114	62	40
2号土坑	48	41	16
3号土坑	81	—	13
4号土坑	—	73	18
5号土坑	117	93	36
6号土坑	162	122	52
7号土坑	396	158	58

(注) — 搾乱によって不明



(礫の平面分布図)



(礫の垂直分布図)

### 第3節 遺物の概要

長平衡平遺跡においては、主にF B層中より石器、土器の出土があった。石器に関しては、表上採集のものを含めて石礫が10点発見されており、他の石器に比べて多い。また、黒耀石の剝片やチップなど58点出土したが、散在的に分布し、かつ造構との関わりもないと判断し、資料の掲載は割愛した。

土器に関しては、すべて破片のみで、接合復原は不可能であった。縄文時代中期のものが圧倒的に多く、中でも勝坂式土器がその中心である。なお、土器も石器と同様に全般的に散漫的分布を示しており、造構との関連はつかめない。

### 第4節 土 器

長平衡平遺跡からは、縄文時代早期および中期の土器が主に出土している。土器は型式不明のものを含めて6群に分類した。分類に関しては以下の通りである。

#### 1群 条痕文系－早期

- a類 茅山式（野島式あるいは鶴ヶ島台式）（第13図1、2）
- b類 茅山式（茅山下唇式）（第13図3）

#### 2群 勝坂式以前－中期

- a類 五領ヶ台式（第13図4）

#### 3群 勝坂式（新道期）－中期

- a類 古段階（第13図5、6）
- b類 新段階（第13図7～9）

#### 4群 勝坂式（藤内期）－中期

- a類 降帶連続爪形文（第13図10～20）
- b類 横帶区画連続爪形文（第13図21、第14図22～25）
- c類 縱位区画パネル文（第14図26～34）

#### 5群 東海系土器－中期

- a類 山田平式？（第14図35、36）

#### 6群 型式不明

- a類 縄文以外の文様（第14図37～39）
- b類 縄文中心の文様（第14図40～44）
- c類 無文（第14図45）

#### 1群 早期の条痕文系の上器を本群とする。胎土内に纖維を含むのが特徴である。

a類 1、2ともに部位は胴部である。型式は野島式か鶴ヶ島台式のいずれかに属する。不規則な方向に沈線が見られる。

b類 3の一片のみである。部位は胴部である、焼成は良好である。指頭により凹線文が上下左右に3本施されている。

2群 中期初頭の五領ヶ台式土器を本群とする。勝坂式土器に先行する型式であるが、長平衡平遺跡からは1片のみの出土である。

a類 4は波状口縁の一部である。半截竹管による単沈線が施されている。

3群 中期中葉前半の勝坂式土器（新道期）を本群とする。新旧関係によって2分類できる。

a類 5、6は三角押文が見られる。5は古段階の特徴を示す幅広の密接した爪形文が、隆帯上に施されている。

b類 7～9は二角押文と爪形文が施されている。a類に比して、施文が簡略化されており、新段階の特徴をよく示す。

4群 中期中葉後半の勝坂式土器（藤内期）を本群とする。長平衡平遺跡では最も多く出土している型式である。各土器片の特徴的施文によって分類した。大部分の土器に半截竹管による沈線が見られる。

a類 隆帯上に連続爪形文（キャタピラ文）が施されているのが共通の特徴である。12は、上方の横隆帯上の連続爪形文と曲線隆帯上の爪形文とは文様間の間隔が異なり、後者の方が密である。

14、15は、同一個体の可能性があるが、接合は不可である。16は新道期の三角押文の特徴を残しているが、すでに沈線化している。19は、半截竹管による明確な沈線が施されている。頂部は磨耗しているが、口縁にはほど近い部位である。

b類 連続爪形文が横帯に区画されているのが共通の特徴である。24は脛部であるが、梢円文が施されている。

c類 藤内期に盛行した縦位区画のパネル文が施されているのが共通の特徴である。27は藤内期の特徴をよく示す、いわゆる温泉マーク文が施文されている。32は隆帯上に爪によるヤバネ文様が施されている。

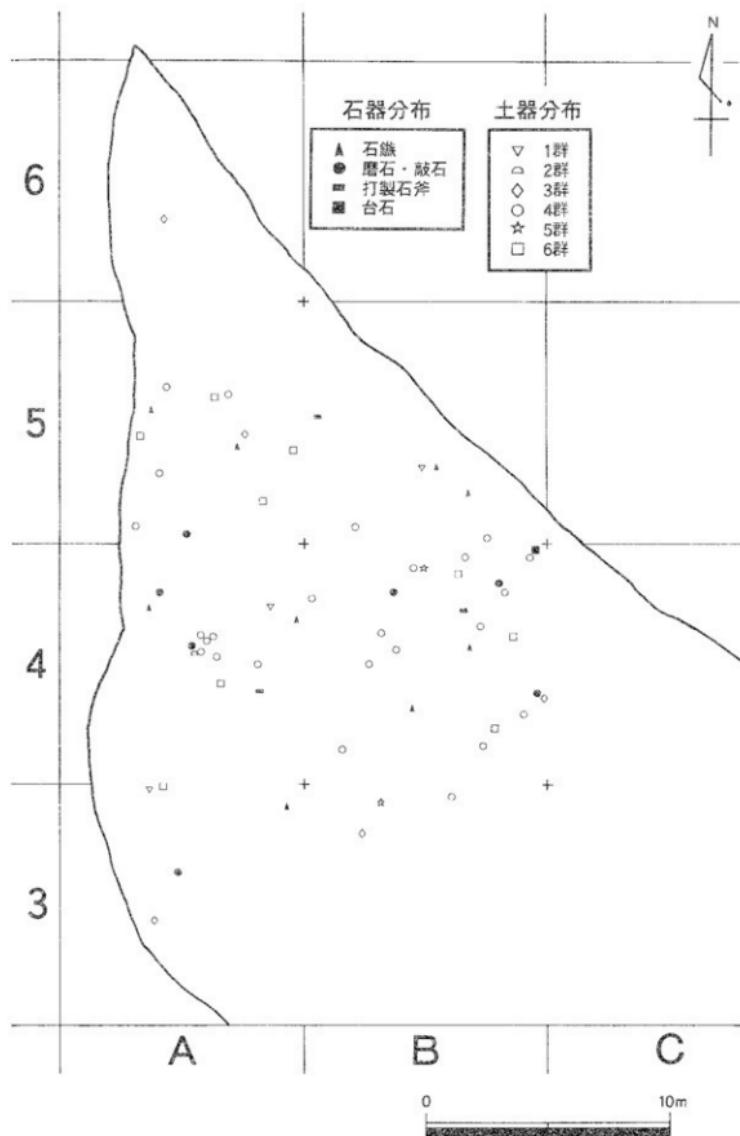
5群 中期の東海系薄手上器群を本群とする。

a類 愛知県内海町に所在する山田平遺跡より出土した上器を標式資料とした山田平式土器の可能性がある。勝坂式土器の新道式から藤内期に並行する型式である。

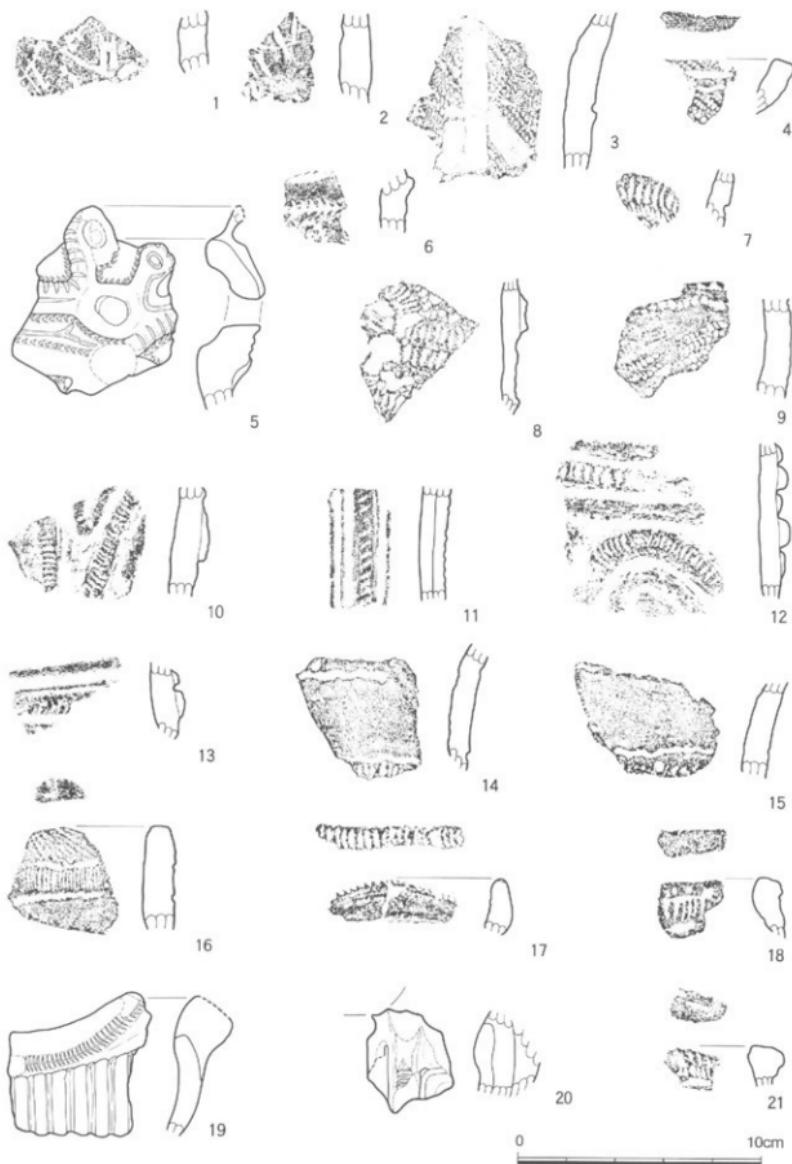
6群 各型式の明確な特徴をつかむことが不可能で型式不明の上器として一括した。

a類 38は三角押文と連続爪形文が施文されている。中期の勝坂式に類するものと思われる。

b類 44は、縞文の他に、波状沈線が施文されている。中期の勝坂式に類するものと思われる。



第12図 遺物出土分布図



第13図 繩文土器拓影図1・縄文土器実測図



第14図 繩文土器拓影図 2

表5 土器觀察表

No.	査定	分類	F1	遺物番号	属性	層厚 (mm)	第7	構成	色調	面文等
1	泰山	1-a	B-5	060	F1B	11	石英、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、鐵礦を含む	やや不良	明赤褐色	虎斑
2	泰山	1-a	A-4	055	F1B	14	石英、長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、鐵礦を含む	やや不良	明赤褐色	虎斑
3	泰山	1-b	A-3	004 (Y)	YLA相当	14	石英、長石、輝石、白色粒子、白色片岩、鐵礦を含む	良成	明赤褐色	指側による凹面文、Rしの純文
4	五葉ヶ丘	2-a	A-4	033	F1B	10	石英、長石、輝石、黑色粒子	良成	赤褐色	波状凸面形、單穴端、Rしの純文
5	勝坂(新道)	3-a	A-6	011 (D)	表土	26	石英、長石、輝石、白色粒子	やや不良	に赤褐色	把手部分、丸あり、三角穿孔、薄壁上に細かい爪突文
6	勝坂(新道)	3-a	A-3	002 (Y)	F1B	11	石英、長石、輝石、白色粒子	やや不良	褐色	三角形文のみ
7	勝坂(新道)	3-b	A-0	043 (H)	表土	9	石英、長石、輝石、安山岩片、鐵礦を含む	良成	明赤褐色	三角穿孔文と八角文
8	勝坂(新道)	3-b	B-3	007 (H)	表土	11	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	明赤褐色	三角穿孔文と爪突文
9	勝坂(新道)	3-b	B-5	016 (H)	表土	12	石英、長石、輝石、黑色粒子	良成	赤褐色	三角形文と虎斑文
10	勝坂(新道)	4-a	A-4	015	F1B	17	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	に赤褐色	薄壁上に爪突文
11	勝坂(新道)	4-a	B-4	061	F1B	11	石英、長石、白色粒子、金雲母	良成	赤褐色	半裁竹型による平行凹線
12	勝坂(新道)	4-a	B-5	140	F1B	13	石英、長石、輝石、白色粒子、白色片岩、角閃石	やや不良	黒褐色	单穿孔上に爪突文
13	勝坂(新道)	4-a	A-4	019	F1B	14	石英、長石、輝石、安山岩片、金雲母	やや不良	に赤褐色	半裁竹型による凹線
14	勝坂(新道)	4-a	B-4	001 (H)	表土	10	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	普通	明赤褐色	半裁竹型による凹線
15	勝坂(新道)	4-a	B-4	005 (H)	表土	11	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	普通	明赤褐色	薄壁上に爪突文
16	勝坂(新道)	4-a	B-4	070	F1B	13	石英、長石、黑色粒子、赤色粒子、白色片岩、金雲母	普通	赤褐色	口縁部・指側、三角穿孔
17	勝坂(新道)	4-a	A-4	032	F1B	10	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	良成	赤褐色	口縫部
18	勝坂(新道)	4-a	B-5	122	F1B	12	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母、鐵礦を含む	普通	明赤褐色	口縫部、薄壁上に爪突文
19	勝坂(新道)	4-a	B-1	093 (K)	F1B	23	石英、長石、輝石、黑色粒子、金雲母	良成	赤褐色	半裁竹型による明瞭な凹線
20	勝坂(新道)	4-a	A-5	128	F1B	26	石英、長石、輝石、黑色粒子、赤色粒子、金雲母	普通	明赤褐色	底部に上る矢印文模様あり
21	勝坂(新道)	4-b	A-1	039	F1B	15	石英、長石、輝石、安山岩片、鐵礦を含む	やや不良	赤褐色	口縫部、半裁竹型による凹線
22	勝坂(新道)	4-b	B-3	006 (H)	表土	12	石英、長石、輝石、金雲母	良成	赤褐色	半裁竹型による凹線
23	勝坂(新道)	4-b	B-6	087	F1B	13	石英、長石、輝石、白色片岩	やや不良	赤褐色	半裁竹型による凹線
24	勝坂(新道)	4-b	B-4	056	F1B	11	石英、長石、輝石、金雲母	良成	赤褐色	薄壁上に爪突文、長い平底竹型で横
25	勝坂(新道)	4-b	A-5	014 (H)	表土	10	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	普通	赤褐色	半裁竹型による凹線
26	勝坂(新道)	4-c	A-1	031	F1B	10	石英、長石、輝石、安山岩片	良成	赤褐色	半裁竹型による凹線
27	勝坂(新道)	4-c	B-4	121	G号土器種土	10	石英、長石、黑色粒子、白色片岩、鐵礦を含む	やや不良	に赤褐色	底部と平行凹線による、いわゆる底面マークが確認
28	勝坂(新道)	4-c	A-4	012	F1B	8	石英、長石、角閃石、白色粒子、白色片岩、鐵礦を含む	やや不良	に赤褐色	半裁竹型による凹線
29	勝坂(新道)	4-c	B-4	085	F1B	11	石英、長石、輝石、白色粒子、白色片岩	良成	赤褐色	半裁竹型による凹線
30	勝坂(新道)	4-c	B-4	064	F1B	9	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	赤褐色	半裁竹型による底部が高張状に盛り
31	勝坂(新道)	4-c	A-5	015 (G)	表土	12	石英、長石、輝石、金雲母	良成	赤褐色	半裁竹型による底部が高張状に盛り
32	勝坂(新道)	4-c	B-4	068	F1B	13	石英、長石、白色粒子、金雲母	やや不良	赤褐色	半裁竹型による底部、薄壁上にナバ
33	勝坂(新道)	4-c	A-5	127	F1B	9	石英、長石、白色粒子、金雲母	やや不良	赤褐色	手裁竹型による底部、断面が鋸歯状
34	勝坂(新道)	4-c	B-4	137	F1B上端粗上	9	石英、長石、輝石、金雲母	やや不良	赤褐色	手裁竹型による底部
35	東南系(山田平?)	5-a	B-4	073	F1B	6	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	明赤褐色	羅手、無文、斜肩直腹あり
36	東南系(山田平?)	5-a	B-3	008	F1B	5	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	赤褐色	羅手、無文
37	不明	6-a	B-4	083	F1B	13	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	引出褐色	口縫部・底部斜腹などぞりが凹面内に現れ
38	不明	6-a	B-4	077	F1B	7	石英、長石、白色粒子、鐵礦	良成	明赤褐色	三角穿孔、爪突文
39	不明	6-a	A-3	049	F1B	7	石英、輝石	良成	に赤褐色	明瞭な底張形状あり
40	不明	6-b	A-5	017 (H)	表土	13	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	良成	赤褐色	口縫部、Rしの純文
41	不明	6-b	A-4	047	F1B	8	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	赤褐色	Rしの純文
42	不明	6-b	B-4	001 (Y)	F1B	9	石英、長石、輝石、白色粒子、金雲母	やや不良	複数赤褐色	Rしの純文
43	不明	6-b	B-4	126	F1B	13	石英、長石、輝石、白色片岩	良成	赤褐色	Rしの純文
44	不明	6-b	A-5	063	F1B	11	石英、長石、輝石、白色片岩、金雲母	良成	明赤褐色	半裁竹型による凹線
45	不明	6-c	A-5	008 (H)	表土	16	石英、長石、輝石、白色片岩、金雲母	普通	赤褐色	口縫部、無文、大底縫あり

## 第5節 石 器

長平衡平道跡からは、石鐵10点、楔形石器1点、打製石斧3点、磨石、敲石兼用の複合石器が3点、磨石4点、台石1点など礫石器が計8点出土している。

### (1) 石 鐵 (第15図1~10)

10点のうち8点が黒耀石製である。石鐵の基部は、すべて円形に抉れている。21のみ有茎（柄のあるもの）である。長脚鎌が中心であるが、二角鎌も3点ある。黒耀石に関しては肉眼観察においてガラス光沢に富み、透明度が高い信州産が主と思われるが、21は灰黒色不透明でガラス光沢が鈍く、1mm程度の円形不純物を含む、中伊豆柏崎産の特徴を示している。

### (2) 楔形石器 (第15図11)

幅広の剝片を素材とし、上下両端から対向する剝離が認められる。打面は線状に済れている。右側面に密集したリングが認められ、楔形石器の特徴をよく示す。

### (3) 打製石斧 (第16図12~14)

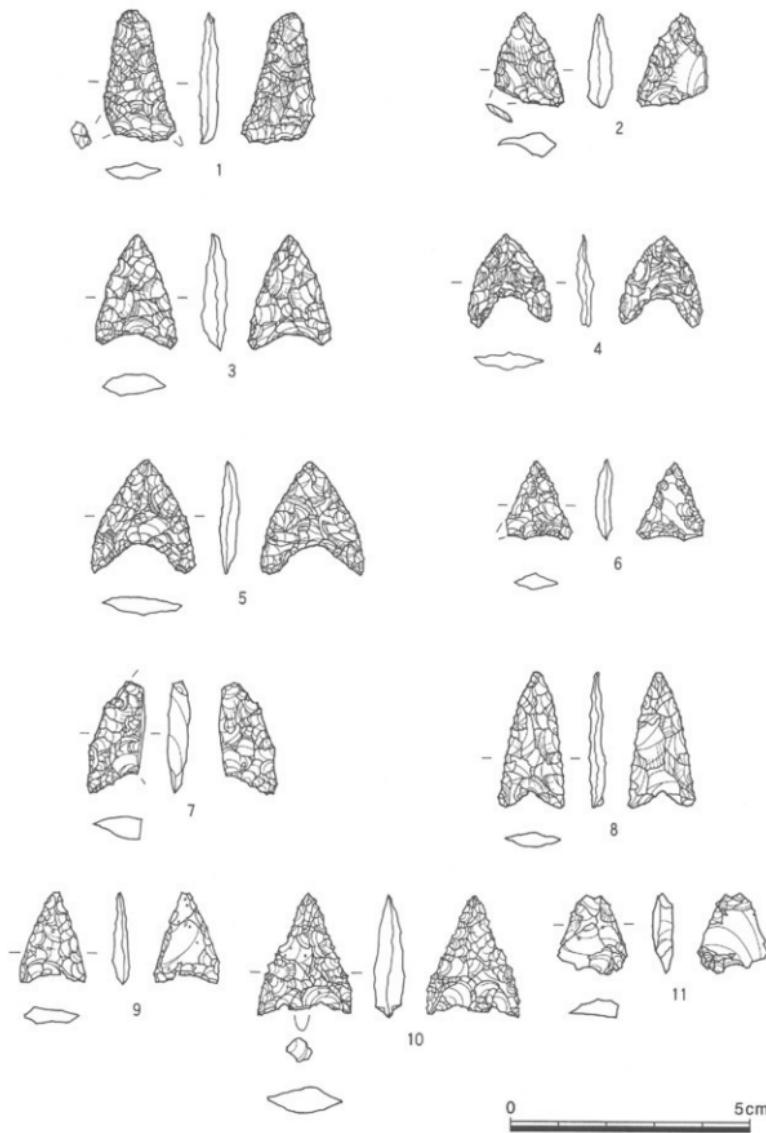
砂岩系のものが使用されているのが特徴である。

### (4) 磨石・敲石・台石 (第16図15、16、第17・18図)

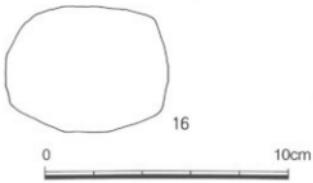
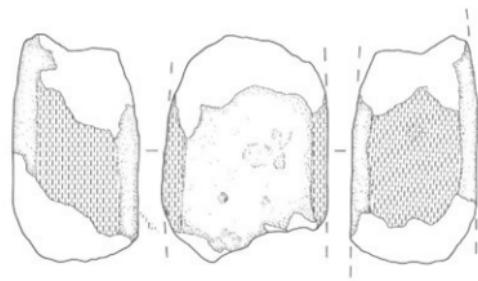
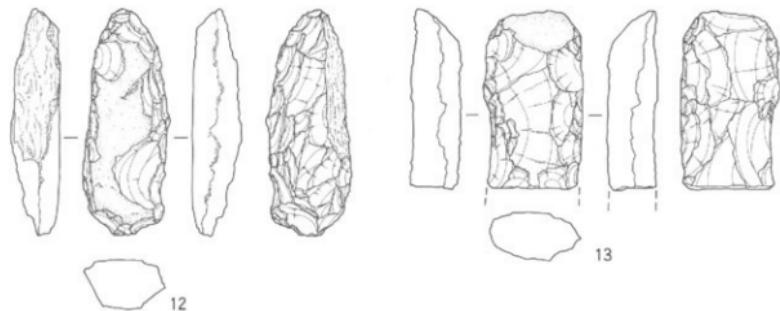
磨石・敲石兼用の複合石器が3点、磨石4点、台石1点が出土している。18、19は使用による磨耗が極めて弱い。21は表面および左右両端が使用による磨耗が他に比して大きい。

表6 石器観察表

No.	器種	グリット	遺物番号	層位	石 材	幅長 (mm)	横長 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備 考
1	石鐵	B-5	006(H)	表土	黒耀石	27	(18)	4	(1.21)	長脚鎌、未製品
2	石鐵	A-1	003	FBb	黒耀石	(20)	(14)	5	(0.72)	長脚鎌、未製品
3	石鐵	A-3	008	FBb	黒耀石	23	17	5	1.21	長脚鎌
4	石鐵	A-5	052	FBb	黒耀石	19	18	3	0.67	三角鎌、透明度が高い
5	石鐵	A-5	075	FBb	黒耀石	24	21	(4)	1.04	三角鎌
6	石鐵	B-4	089	FBb	黒耀石	17	(14)	3	(0.50)	三角鎌、一部破損
7	石鐵	表様 表様1		表土	黒耀石	23	(12)	4	(1.18)	長脚鎌、1/2破損
8	石鐵	A-4	011	FBb	凝灰質頁岩	28	14	3	1.10	長脚鎌
9	石鐵	B-5	004(Y)	YLU相当	ガラス質黒色安山岩	19	13	4	(0.76)	長脚鎌、全面風化
10	石鐵	B-4	001(H)	Ku	黒耀石	(26)	19	6	(1.74)	長脚鎌、柄折損
11	楔形石器	表様 表様2		表土	黒耀石	17	15	4	0.72	剝離世界
12	打製石斧	B-4	044	FBb	珪質砂岩	93	36	20	76.24	短握型、自然直残、刃部磨耗
13	打製石斧	B-5	002	FBb	凝灰質砂岩	(74)	41	21	(99.59)	短握型、刃部自然直軸川、基部折損
14	打製石斧	A-4	009	FBb	凝灰質砂岩	(40)	33	(14)	(22.35)	短握型？刃部折損
15	磨石・敲石	A-2	015	FBb	安山岩	(46)	(60)	(35)	(15.69)	長脚鎌敲打痕
16	磨石・敲石	B-4	063	FBb	安山岩	(94)	(68)	(52)	(496.09)	上下端頭欠損、磨耗が激しい
17	磨石・敲石	B-4	001	FBb	石英安山岩	61	50	25	81.73	打盤、擦痕
18	磨石	A-4	016	FBb	安山岩	84	54	48	379.00	
19	磨石	B-4	063	表土	安山岩質頁岩	69	42	29	99.87	
20	磨石	A-4	007	FBb	安山岩	140	110	70	1457.47	四形の打盤
21	磨石	A-5	005(H)	表土	安山岩	145	110	80	1851.40	
22	台石	B-4	084	7号土坑埋土	安山岩	(164)	(130)	(49)	(658.24)	打痕、1/2以上欠損

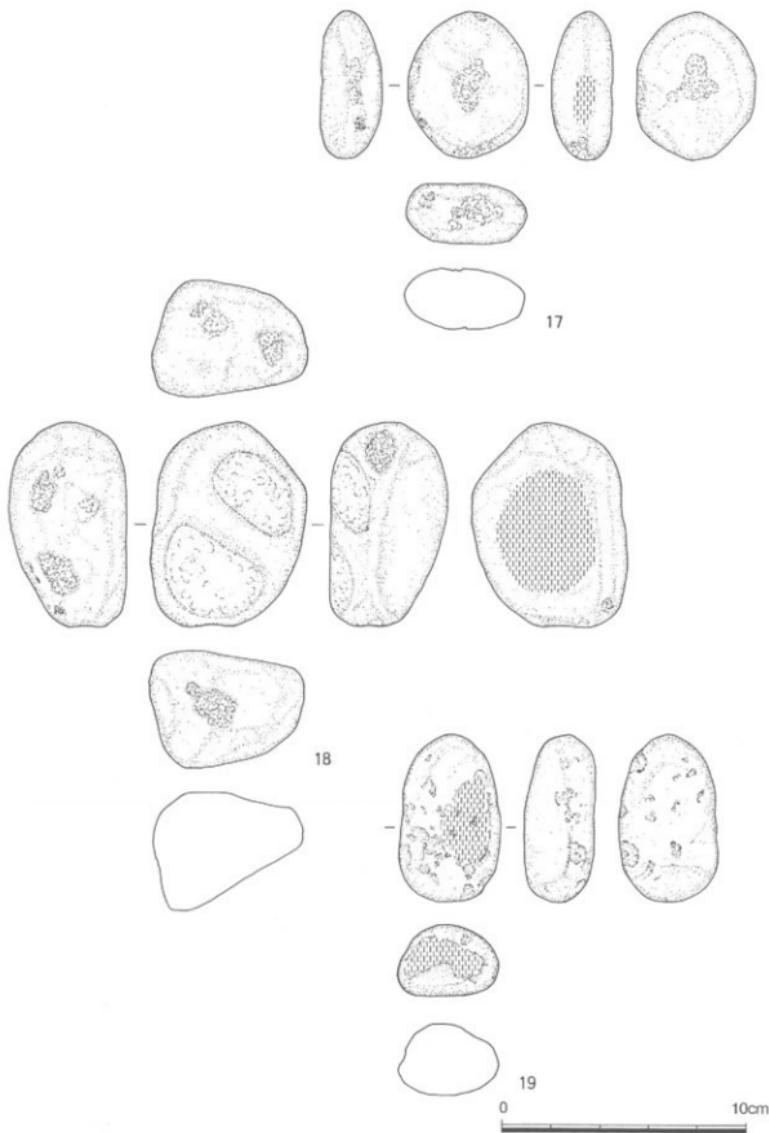


第15図 石器・模形石器実測図 (1/1)

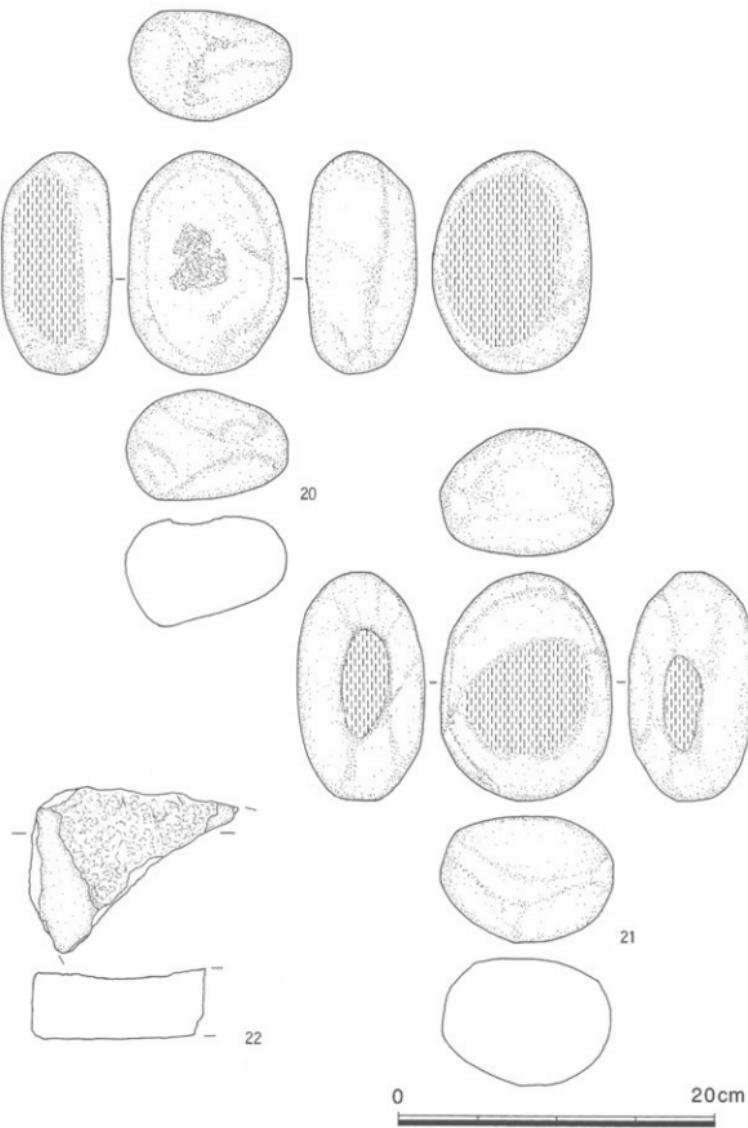


0 10cm

第16図 打製石斧実測図、磨石・敲石・台石実測図1 (2/1)



第17図 磨石・破石・台石実測図2 (2/1)



第18図 磨石・敲石・台石実測図3 (1/3)

## 第IV章 まとめ

長平衡平遺跡は、確認調査の段階ではII石器時代の礫群を中心とする遺跡と考えられていた。しかし本調査に至り、旧石器時代の礫群と思われたものは中部ロームの自然礫層であることが判った。また、トレンチ調査の結果、遺跡の中心は縄文時代の遺物包含層であるF B層であることをつかんだ。調査は、住居跡などのような明確な遺構は検出されず、数基の土坑検出の他には、包含層調査が主になつた。

遺構に関しては、集石土坑が1基検出された。徳倉片平山J遺跡で発見された2基の集石土坑に比べて、小規模であるが、やや深く掘り込まれている。受熱による赤化が認められる礫も含まれていたが、燃焼度が極めて弱い点などから推測すると、ごく短期間に蒸し焼きや石焼き調理などの施設として使用されたことが窺われる。集石土坑内からの出土遺物は黒耀石チップのみであったが、他から出土している土器や石器との関連はつかめず、時期は不明である。

出土した石器に関しては、石鎌を中心に黒耀石剝片などが70点余出土したが、出土地点は散在しており、集中箇所が存在しない。斜面地形なども考慮すると石器製作地などではないと思われる。

また、『静岡県文化財地名表I』(1988年発行)には、縄文時代早期の縄文土器散布地となっているが、今回の調査箇所では中期勝坂期の土器が、他の時期に比べて多く出土した。このことは、谷斜面に立地する調査箇所に、遺跡の主体部と思われる北東側の尾根筋部分より放棄された遺物が縄文時代中期に特に多く堆積したものとも考えられる。また、この時期に縄文人が周辺を活動していた根拠にもなる。さらに、関東系・中部高地系文化の影響が強い箱根山西麓地域において、長平衡平遺跡からは東海系の薄手型土器(勝坂式土器に並行するもの)の出土があるが、当時の交易範囲の広さを窺わせるものと思われる。

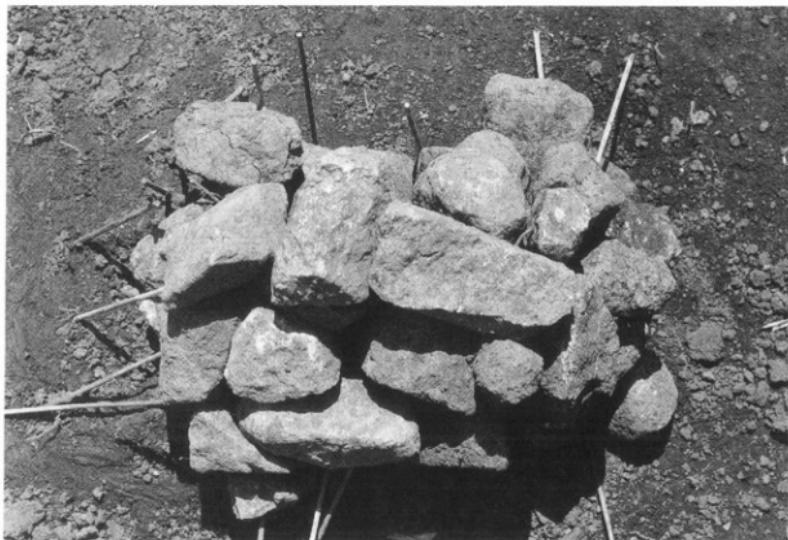
以上の点を包括的に推察すると、今回調査した長平衡平遺跡は、遺跡の外縁部に位置し、主体部から放棄された遺物が斜面地形に堆積した結果、遺物包含層を形成した。また、集石土坑や焼土を含む土坑が存在することより、キャンプサイト的な場として利用された可能性がある。

現在、小池遺跡や徳倉B遺跡、上ノ池遺跡などの周辺遺跡の整理作業が進められているが、各々の遺跡の資料が整う中で、長平衡平遺跡の位置付けも次第に明らかになってくるものと思われる。

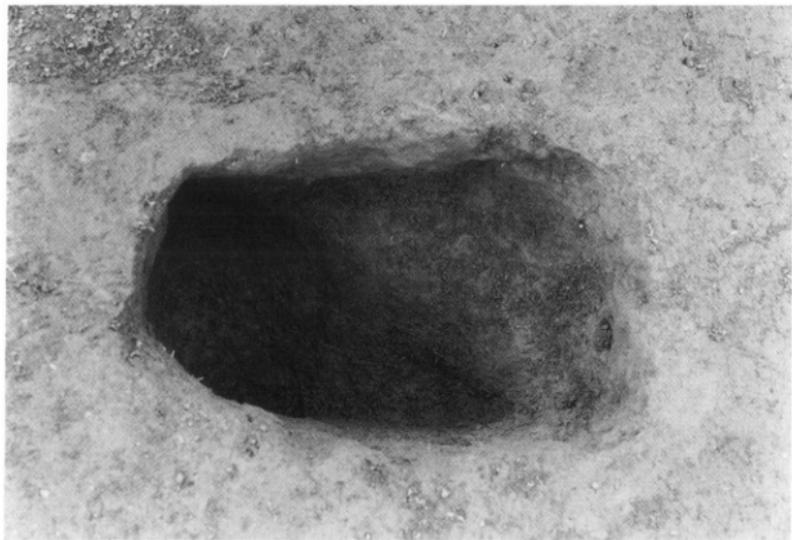
### 参考文献

- 二島市誌編纂委員会 1958年『三島市誌 上巻』三島市  
中山 貞治 1997年「縄文中期初頭の西関東・中部高地における東海系土器」『東京考古』第15号  
東京考古談話会  
芦川忠利・池谷初恵 1990年『二島スプリングスC、Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書I』三島市教育委員会  
小野千賀子他 1990年『下原遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所  
横山 秀昭 1996年『加茂ノ洞B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所  
笛原千賀子 1997年『八田原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 写 真 図 版

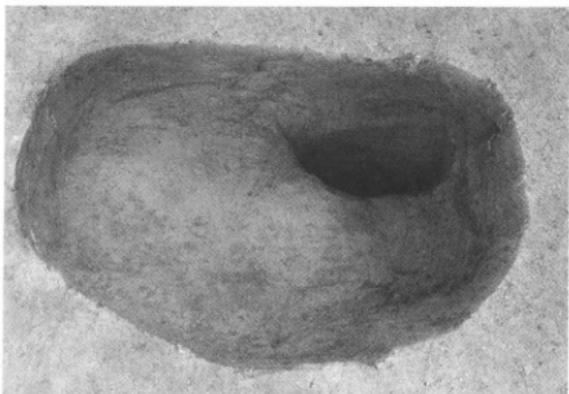


1号集石土坑検出状況（俯瞰）

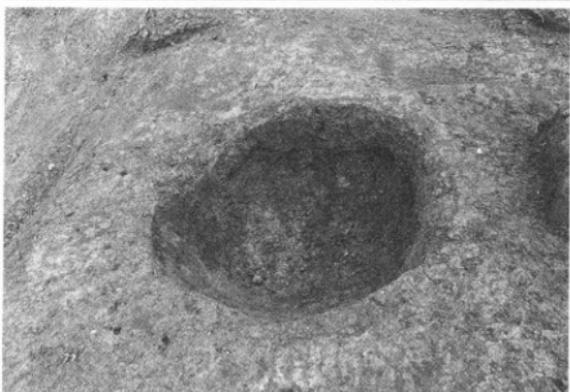


1号集石土坑完掘状況（俯瞰）

1号土坑完掘状況  
(北東より)



2号土坑完掘状況  
(南より)



5号土坑完掘状況  
(北西より)



6号土坑完掘状況  
(南東より)

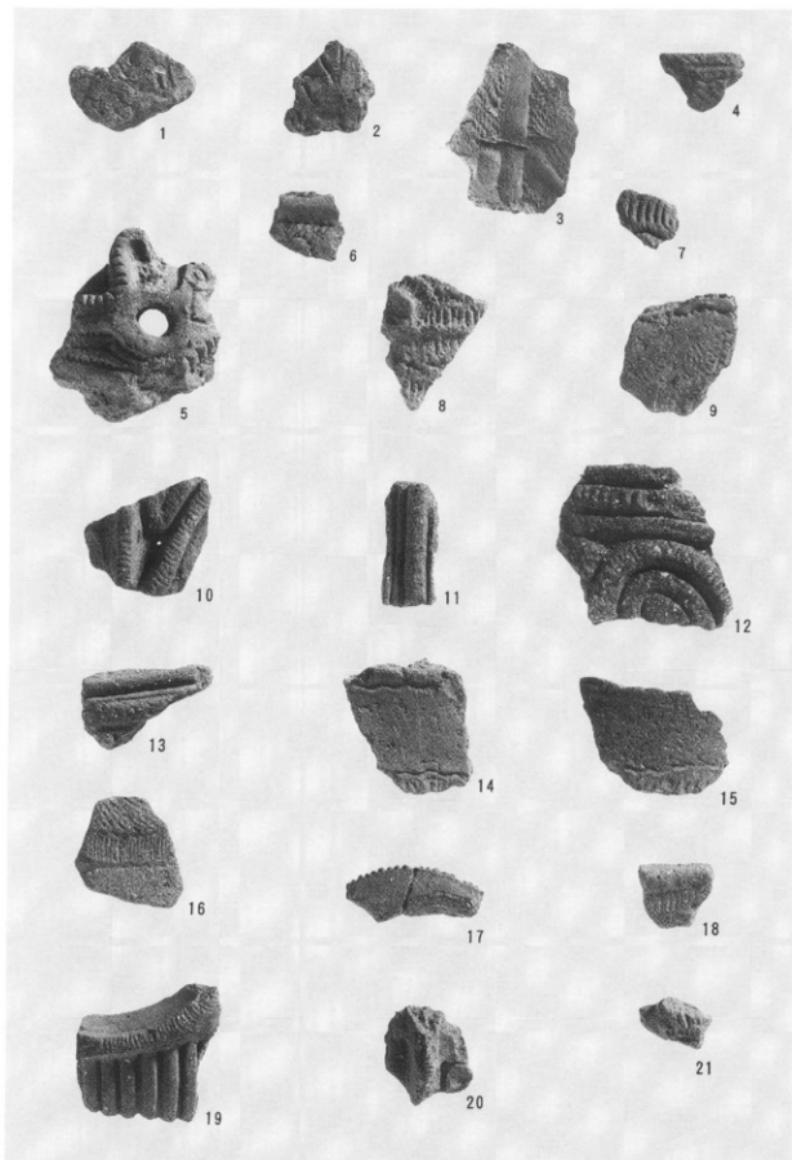


7号土坑完掘状況  
(南西より)

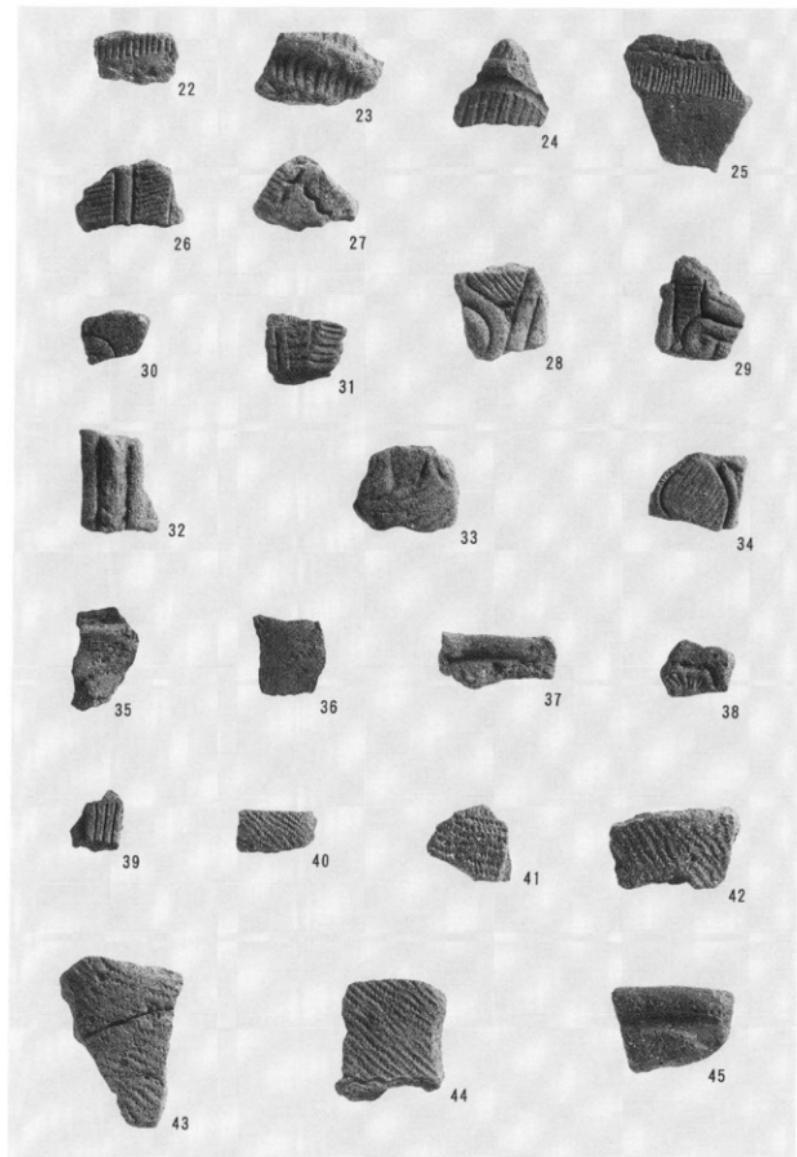


砾の集中地点  
(2区、南より)



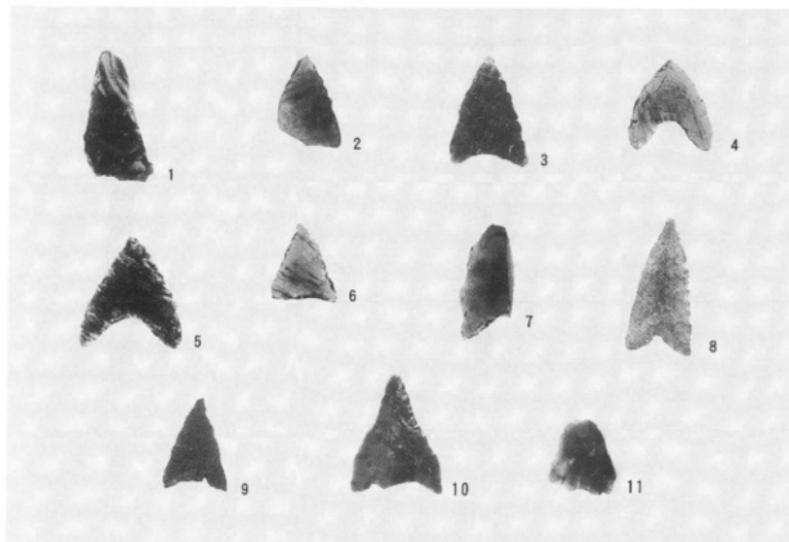


縄文土器 (1—21)

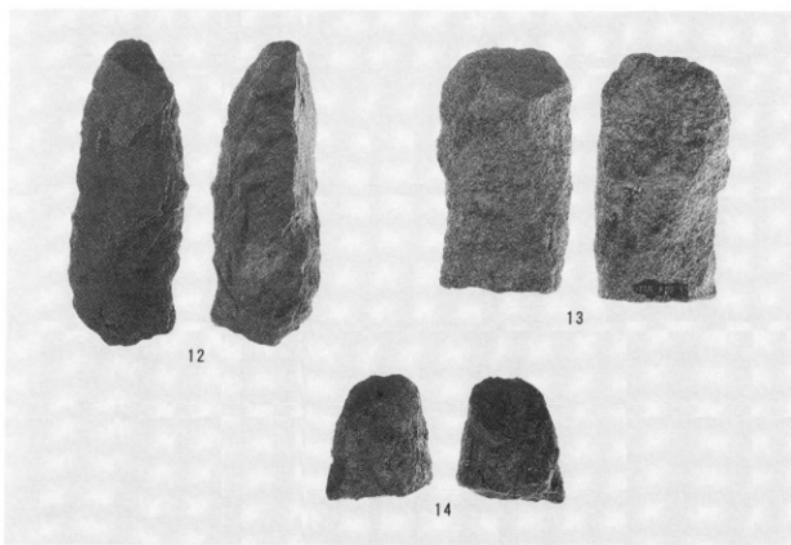


縄文土器 (22—45)

図版6



石鏃・楔形石器



打製石斧



15



16



17



18



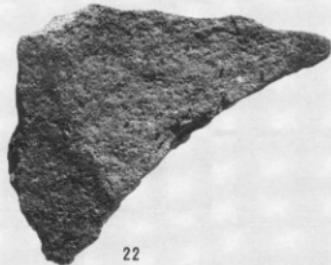
19



20



21



22

磨石・敲石・台石

〈発掘調査参加者〉

栗原 計二	小林 将	齊藤 晋	鈴木 勝征	岸澤 功	上屋 福宣
中津 雅俊	中西 康徳	深澤雄太郎	山内 修平	吉田 友彦	渡邊喜久夫
渡辺 武夫	渡辺 弇	安達 敏子	岩瀬喜代美	遠藤登志子	小池せつ子
小寺 知子	菱谷 貴子	平光 陽子	平光 マサ	渡辺なほみ	

〈整理作業参加者〉

鈴木 里江	伊澤 幸恵	加藤 直美	坂口 充世	勝又 幸子	岩瀬喜代美
小池せつ子	渡辺なほみ				
齊藤 晋	森崎富士夫				

〈調査協力者〉

調査では次の方々に御指導、御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。（敬称略）

芦川 忠利 鈴木 敏中

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ちょうべえだいらいせき						
書名	長平衡平遺跡						
副書名	平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所報告						
シリーズ番号	第97集						
編著者名	後藤正人						
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422 静岡県静岡市谷田23-20 TEL. 054-262-4261						
発行年月日	1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯／東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市町村	遺跡番号						
ちょうべえだいら 長平衡平	あましどくら 三島市徳倉 1158番地他	22206	108	35° 08' 88" 138° 55' 10"	1997年4月 1998年3月	543m <sup>2</sup>	道路建設 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長平衡平	散布地	縄文時代	土坑	縄文土器 石鏃 楔形石器 打製石斧 磨石・敲石・台石	集石土坑1基		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第97集

長 平 衛 平 遺 跡

平成 9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月31日発行

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 みどり美術印刷株式会社  
沼津市沼北町2丁目16番19号  
TEL(0559)21-1839㈹